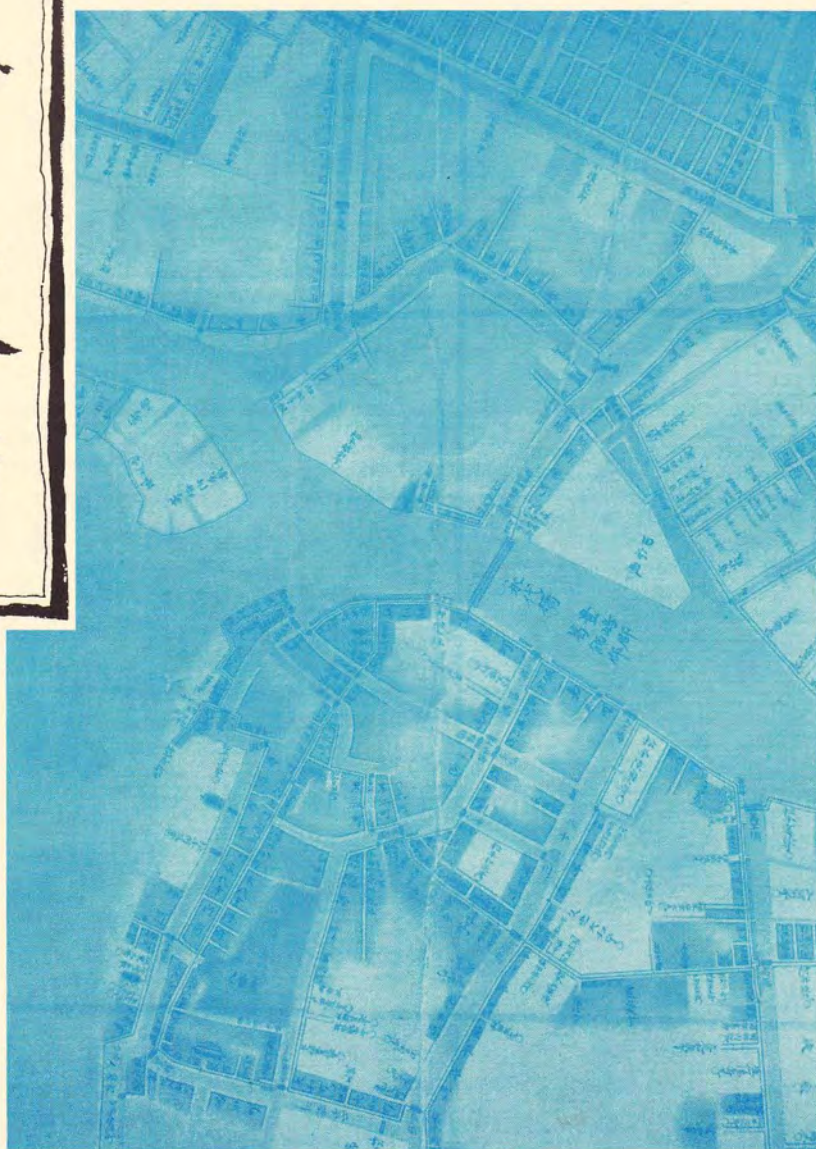


季刊 史料と伊能図

伊能忠敬

研究

一九九七年夏季 第一二号



伊能忠敬研究会

表紙図解説 国土地理院蔵 江戸府内図南部（部分）

江戸府内図の部分である。伊能測量隊は、第九回目の九州第二次測量から、文化十一年五月二十二日に帰着したあと、文化十二年の二月三日から十九日まで、十七日かけて諸街道の始発点と日本橋との間の距離を測量して最終的な日本図を作成する基本データを完結した。

忠敬はなお、関東周辺の未測量部分、例えば霞ヶ浦などを測りたかったが、幕府は江戸の測量を命じた。江戸図はすでに多く出ており、忠敬は気のりがしなかったが幕命なので作成した。

本図は、縮尺はよいのだが、記入された情報は他の江戸図と比較すると多くはない。

江戸府内図の南部と北部を所蔵するのは国土地理院のみであるが、他に国立歴史民俗博物館、神戸市立博物館、気象庁にも南部あるいは北部のみが所蔵されている。いずれも写本で、副本はいまのところ発見されていない。

図の中央部分に黒江町とみえるのは忠敬の隠宅があった場所である。深川の富岡八幡宮のすぐ近くである。

測量に出発のときは、必ず内弟子と従者をつれて富岡八幡宮に参拝してから街道へと向かった。

（題字は忠敬の筆跡）

（渡辺）

目次

（表紙写真解説） 目次

いま、なぜ伊能忠敬なのか

新参者「伊能忠敬フリーク」として

例会報告

九七年度春季例会報告

例会に出席の記

例会に参加して

随想

初めての記念館と源空寺

トピックス

昭和八年度版小学国史の教師用教科書

史料紹介

伊能家文書紹介 五

●伊能図のプロモーターたち

●つく嶋

伊能測量の地域史料

●鯨と五島と伊能忠敬

連載・第六次測量日記 五

伊能図探究 十二

伊能図見て歩き 五

京都大学図書館蔵 伊能諸図

須賀田家蔵 天の橋立図

蓬左文庫蔵 沿海地図小図

入会案内・投稿規定・編集後記

渡辺 一郎 1

佐藤 嘉尚 3

武田 威 4

白根 貞夫 6

小池 美幸 7

首藤 郁夫 9

編集部 10

安藤由紀子 11

伊能 陽子 16

岡本 暉子 19

佐久間達夫 24

渡辺 一郎 28

伊能測量開始二〇〇年

いま、なぜ伊能忠敬なのか

伊能忠敬研究会 事務局長 渡辺 一郎

現在の日本の社会はまさに混濁の世である。

戦後五〇年、民主化と経済成長は達成したが、国家と国民は理想や目標を失ってしまった。政治は族議員による関連産業への利益誘導組織と化し、規制産業は規制に安住して国際産業の真剣な合理化を横目に惰眠をむさぼり、行政機構の根幹をなす官僚制は制度疲労を起している。政治家、官僚、事業家の個人々々には立派な見識があるのだが、こと既存組織の利害に関係すると、一步も譲らず百鴨騒鳴の状態となって調整がつかない。

これこそ末世である。この国の将来にたいして何も期待できないという実感がつよい。

いまから二〇〇年前の一八〇〇年に、五五才の伊能忠敬は身内の若者たった五人をつれて、蝦夷地測量の第一歩を踏み出した。当時の五五才は今なら六五才にも相当するだろう。このころも、文化・文政の江戸文化爛熟期であった。

養子にはいった佐原の商家を立て直し、五〇才で隠居したのちの第二の仕事である。本家の家産は三万両というから、いまのお金にすれば、三〇億くらいは稼いだことになるだろう。商家の隠居として、いまなら名誉会長にでもなつて、歌、俳諧でもやっていけばよかった。

それにもかかわらず、お金にはならない学問のために、また将来必須な正確な地図作りのために、役所から少額の補助金(補助率二〇%)を貰って極北の地に旅立ったのであった。この第一歩が日本全図完成へとつながった。

伊能が、はじめから日本全土を測量する気があったかどうかはわからない。多分、なかったと思われる。蝦夷地測量、本州東海岸測量、日本東半分の地図作成と、実績を積み上げて日本全土の測量をすることになり、最終的な伊能版日本図が完成したのは一八二一年である。ところが、本当に使われたのは、五〇年後の明治初年以降であった。

伊能は成功した事業家であった。蝦夷地測量は節約して一〇〇両の経費がかかったから、今のお金では一〇〇〇万円くらい使ったことになる。測量器械などの準備にもほぼ同額を、また第二次測量でも継続して同程度の費用をポケットから払っている。稼いだお金を好きなことに遣う。それはそれで、うちやましいことであるが、そのうえに、次世代のためのプロジェクトを起し、五五才の自らが隊長となつて二〇才前後の若者をつれて実行する抜群の行動力があつた。

測量開始の動機については、金持ちの道楽とか、名声を求めてとか、考えられなくはない。実際に始めはそうだったろう。しかし、伊能の目標は途中で変質した。測量事業の内容も大きく変化している。第一次・第二次測量は伊能の自費測量、第三次・第四次測量は日本東半部の地図作成をめざした公費測量、第五次以降は幕府直轄事業となった。

結局、一七年間に一〇回にわたって測量旅行がおこなわれる。二度や三度なら、名声を求めてという見方も成り立つが、これだけの作業は確乎たる信念なしには実行できなかったろう。

当時の伊能測量の真の狙いについては、色々調べてみても明らかでない。幕府内でのように使われたかもわからない。北辺警備とか沿岸防備の資料にといわれるが、警備を命じられた諸藩にも貸与されていないし、幕末まで公刊もされていない。世間に流布していたのは不正確な赤水図であった。また、隊員は測量結果を付き添いの藩士に教えてはいないといわれていた。などから考えると幕府の狙いは徳川家のための地図制作であったと推測される。

忠敬はもちろん幕府の真の狙いは承知していた。しかし、当代一流の先覚者・文化人とのつきあいを通じて、彼は、正確な地図がこれからの社会に必須であることも理解していたとおもう。動機がどうであれ、伊能自身は現世を超越し将来を見据えて仕事をしていたにちがいない。

その想いは見事に的中した。彼が残した伊能図は、五〇年後の明治初年から国土地理院の前身の陸地測量部の基本図として本格的に使われ、部分的には一〇〇年後の昭和初期まで利用されたのである。正に国家百年の計に寄与するものであった。伊能測量開始二〇〇年にあたり声を大にして強調したいと思う。

混濁の平成の世に、目先の利害ではなく、国家・国民の将来を見据えて行動を起こすものはいないのだろうか。伊能のように、合理的で、頑固で、愚直、目標にひたむきに進む者はいないのか。伊能忠敬再発見を標榜する理由である。

さいわいに、気持ちを同じくする有志が各方面にあり、近年に江戸東京博物館で、「伊能忠敬展」が開催され、俳優座が映画・演劇の制作を企画し、日本歩け歩け協会が忠敬の歩いた全国測量のルートをキャラバンする計画を進めている。これらのイベントをつうじて忠敬の考えが広く世間に浸透し、世直しに役立つことを期待している。

新参者「伊能忠敬フリーク」として

佐藤 嘉尚

私が伊能忠敬フリークになったきっかけは、十五年ほど前、「ザ・房総」(読売新聞社刊)という雑誌を編集したことである。房総半島が生んだ歴史的人物という日蓮と伊能忠敬が定番であるから、原稿をしかるべき人に依頼する前に、少し調べてみた。

神田の古本屋などで忠敬関連の文献を入手し、それらに目を通して忠敬の人生をなぞっていると、なんとなく元気が出てくることに気がついた。井上ひさしさんの「四千万歩の男」もかつて新刊のときに一度目を通していたが、改めてじっくり読み、やはり元気づけられた。

忠敬の特徴は、何ととっても、ひとりであつぷりふたり分の人生を生きたことだろう。しかも、前半生と後半生が質・量ともにダイナミックに違う。ひとりでこのくらいのことが出来るのか。それに比べてこのオレは、まだまだ甘っちょろい、がんばらなくっちゃ、となる。

忠敬は決して健康体ではなかったのに、コツコツとやっているうちに、あれだけのことをやってのけた。忠敬が生きていた江戸後期の平均寿命は四十代半ばぐらいではないかと言われているから、彼が測量で日本全国を歩いたのは、現在の年齢感覚に換算すると、七十歳から九十歳までぐらいに相当するのではないだろうか。

そんなふうに通っていたところで、本職である出版の仕事で、高齢化社会や老人介護といったテーマを扱うことが多くなった。そしてあちこち取材しているうちに、こうした事態に対して、私たちは個人としても社会としても、しっかりとした姿勢を確立していないばかりか、困難な状況の前でおろおろしているばかりではないか。

ふと、伊能忠敬が歩いた道を、現代の老若男女がリレー式に踏破してみたらどうだろうか、と思いついた。

笑われるかと思いつつ朝日新聞の清水建宇さん(現「Ronza」編集長)に話したら、氏は身を乗り出して面白がり、そこから「平成の伊能忠敬キャラバン隊——ニッポンを歩こう」プロジェクトがスタートした。この種の話は、話しているうちに春の雪のごとく消えてしまうものが多いが、この話は、朝日新聞社、日本歩け歩け協会、俳優座、国土地理院、伊能忠敬研究会と話が広がるにつれて、雪だるまのごとくどんどん大きくなった。

そしてその流れの中で、五月二十五日、学習院大学での伊能忠敬研究会春の例会に参加させていただいた。八枚の学習院伊能中図の迫力もさることながら、私は、本物の忠敬フリークである会員のみなさんの迫力に脱帽した。堂々たる幕内力士たちの前に出た新参のふんどしかつぎの心境であった。特に安藤由紀子さん河島悦子さんといった女性会員の方々のフリーク振りには、心底感服した。私も精進して早くみなさんと同じレベルの会話をしたいものと思った。

それらはすべて、いみじくも井上ひさしさんが言ったように、「忠敬の、高貴さにまで高められた愚直な精神」のなせる技であろう。没後一八〇年経って、なおかつこれほどの影響力を保持しているのは驚異的なことだと言わざるを得ない。

ともあれ再来年、一九九九年には忠敬キャラバン隊が全国踏破のために旅立つことになるはずである。みんなで元気に二十一世紀を迎えるための今世紀最後にして最大の催し物として成功することを願っているが、それには忠敬フリークの代表である会員のみなさんのご指導ご協力が不可欠である。

九七年度春季例会報告

武田 威

前日は大雨、当日も降り続くことで気を揉ませたが、予報は見事にはずれ、薄日の洩れる緑深い学習院大学の記念館で、一段と中身の濃い例会を開催することができた。来賓十三方を合わせ、七四名の参加であった。

十一時より「展示品公開」、十三時「講演」、十五時「セレモニー」の順で進められた。

展示品は学習院所蔵の伊能中図八舗と、藤岡氏所蔵の伊能図一舗であった。例会実行委員長の斎藤先生（学習院女子部教頭）には、何日も前からの準備で、大変ご苦勞をかけた。

伊能忠敬VTR『人生五〇才からの旅立ち』の放映も行われた。

講演のテーマと発表者

○学習院所蔵 伊能中図について

斎藤 仁

○伊能忠敬と間宮林蔵の師弟の絆

佐久間達夫

○伊能忠敬の折衷尺について

藤岡 健夫

○伊能忠敬の天文観

武田 威

「セレモニー」では渡辺事務局長から、「伊能忠敬再発見」宣言と、只今準備進行中の江戸東京博物館での「伊能忠敬展」、俳優座の映画化、歩け歩け協会の「忠敬ウォーク」に加え、来年佐原にオープンする新記念館を合わせた『三プラス』プロジェクトの説明があり、続いて来賓各位のご挨拶となる。

○学習院大学 小倉学長

「この研究会に入れ込む、斎藤先生の熱気に敬服している。本日は三大プロジェクトの出発点でもあろう。」

○国土地理院 野々村院長

「伊能忠敬の測量ルートを、出来るだけ正確に記録しておきたい。この会のお陰で、思いがけぬ人達との出会いがあった。」

○俳優座 古賀社長

「再来年、俳優座創立五五周年を期して、加藤 剛主演の映画化を計画している。」骨折で入院中の病院から、夫人付き添いでのお来会。おだいじに！

○佐原市 鈴木市長

「新記念館オープン準備中。展示資料に御協力を。町造りのテーマを『地図の町』とした。」

○江戸・東京博物館 板谷・田中学芸員

「渡辺さんとの運命的出会いが伊能忠敬展のきっかけである。来年四〜六月、五〇〜六〇日間の予定。」

○歩け歩け協会 伊藤氏

「朝日新聞社、アワ・プランニング社協力のもとに、全測量路を踏破する「忠敬ウォーク」を計画中。」

○朝日新聞社 田村副本部長

「二十一世紀へ向け、興味あるテーマを提供してもらい、感謝している。成功させるためだけに広く知らせるかが、新聞社の使命である。」

○アワ・プランニング 佐藤社長

「歩くこと（二本足で）こそ、人間の基本である。「忠敬ウォーク」の提案者として、二十一世紀へ向け、そのパワーを受け継ぎたい。」

○練馬伊能家 伊能昌子氏

「忠敬の投じた石の波紋が、こんなに大きくなったことを、故人も喜んでいと思う。」

○忠敬実父貞恒の実家 神保 誠氏

「忠敬の少年時代を明らかにすべく、我が家の古文書を、小島先生を中心に解説中である。」

出席全会員の個性あふれる自己紹介後、会場を目白駅前の「クラブカーズ」に移し、懇親会となった。出席者五五名、話題に事欠かぬ集り故、談果つることなく、やがて遠方からの方々の退席が目立つ頃、会を終えた。

立派な会場の使用と貴重な資料の展示をお許し頂いた学習院に、厚くお礼上げると共に、はるばるの地からお越しの会員諸氏に、深い敬意を表します。

夏月 日 金 曜 (土刊)

1997年(平成9年)5月28日 水曜日

ことば抄

国土地理院長 野々村邦夫さん(54)



25日、学習院大で開かれた伊能忠敬研究会例会で
——私ども、伊能忠敬さんと比べると、はるかに楽をして測量しております。機械もハイテク化し、100分の1ほどの労力になっています。

思うに、伊能さんという人、愛想のいい方ではなかったんじゃないか。55歳から全国を測量したわけで、ヘソ曲がりというか、よほど意志が強くなけ

ればできなかったろう。それが50年、100年先を見通した地図になった。

6月3日は、測量の日です。国土地理院「地図と測量の科学館」（茨城県つくば市）の今年の展示は、明治政府がつくった2万分の1図の復刻版を張り合わせ、明治初期の関東平野を一望する大展示です。その元になった図や技術は伊能さんが実地測量し、徳川幕府に納めた沿岸地図類でした。

今、伊能さんを取り上げる展覧会や演劇、全国キャラバンなどが始まろうとしています。私どもも50年先、100年先を見通した仕事をしたいと考えております。

伊能忠敬は愛想いい方ではなかったのでは

例会に出席の記

白根 貞夫

今まで何回かの例会案内を頂いたが、多忙のため出席できなかった。佐原で一年半前の十一月に、フランスで発見された伊能図の展覧会をみせて頂いた。佐原に中学同窓生の遺族（姉上）がおられるので、その面会と展覧会とを兼ねて出かけ、立派な地図の見学をお土産に帰宅した。昨春の富岡八幡の会合に行けなかったので、一週間後に出かけ、伊能宅跡・間宮林蔵墓・江戸史料館・清澄公園を訪れた。

次に昨十月機関紙を頂き、伊能氏系図があり、中に伊地知季珍とあったので、この方は横須賀鎮守府長官を勤めた海軍中將と思い、早速図書館の資料を複写して伊能陽子さんにお送りした。横須賀在住の私に縁があることはうれしかった。その一月後には呉（小学生の時住んでいた）を訪れる機会があり、入船山記念館で伊能図と長官官舎を見学でき、とてもうれしかった。同館の館報七号を求めた（伊能図と官舎の説明あり）ので、今でも楽しむ事ができ感謝している。五月二十五日（日）の当日、暫くぶりの上京なので、源空寺の墓参をも兼ねる事にした。（前回は昭和五四年三月二日、すなわち一から五までの数字の揃った日だった。東京中央郵便局に立ち寄ったら、蛇のトグロの如く渦を巻き、大変な人出だった。）伊能洋さんの描いた図を見ながら、持参した線香を関係の方々の墓に供えた。

十一時過ぎ目白学習院の会場に恐る恐る出頭した。忠敬ビデオ、学習院所蔵の伊能図を拝見、昼食のあと乃木館を瞥見して午後の講演会に入った。

例会の講演内容は、緻密に調べられた事項の発表であり、列席の一人一人がみな権威のある方と推察した。講演終了後、各自名簿順に自己紹介を行いますと、予告があった。何と小生が、初回出席者なのにドップバッターである。どきどきしていたが定刻となり、司会者から指名された。

ろくな経歴などないから、趣味で陸測図を集め、特に終戦直後には、要塞地帯の五万分の一図を求め、軍秘密の捺印と、上端に赤線の入った地図を数枚持っている。また江戸期の街道を歩く会を主催し、東海道（三島まで）・甲州道・中山道（高崎まで）・大仙道を数回・矢倉沢往還等を歩き、次は日光街道を計画していると、やっと挨拶した。

以下自己紹介が進んでいったが、二三の方の印象を語ってみよう。私の前に渡辺孝雄氏がおられた。前述の入船山館報に「浦島・御手洗測量之図」があり、その解説を渡辺氏が書かれたと、その席上で伺った。更に後になって、昔の小学国史教師用の下巻に、浦島測量時の夜中測量の図が載っていた事を思い出した。

司会の清水靖夫氏、立教高校で教鞭をとっておられるとの事だが、地図を何と十万余枚所蔵されているとのこと。小生には陸測図が千枚弱あるが、住空間が狭められて、妻から文句がでている。「清水さん、しまい場所ありますか。」「それなんです。昔は家内も黙認してくれましたが、最近は渋い顔をしていますよ。」とのお答え。小生大いに意を強うした。

長崎街道である。午前中会場に、立派な地図の本を見ている方があったので、早速求めた。一万分の一の地図に詳細に古道が記されている。私の古道歩きは、今井金吾氏の「今昔東海道旅案内」等をもとにして、いるがこの中の地図は二万五千分の一。一万分の一に古道を落とすのは、大変な労力だと直感した。その著者が席上におられたのには驚

例会
(於学習院大学)



懇談会風景



いた。わざわざ九州からこられたとのこと。この会が全国規模になっているのを感じた。

出版まで六年、六月三日には長崎街道の切手が発行されるとのこと。この河島さんがその筋に働き掛けて、切手発行に至らしたのだらうと、まったく頭のさがる思いであった。後日追加で街道のご本を送って頂き、また横浜中央局で街道切手を求めて収集アルバムに収めた。

最後の懇親会では、鈴木佐原市長御寄贈の銘酒「夢」を御馳走になり、野々村国土地理院長ともお話することができ、終始渡辺一郎氏らの暖かいおもてなしにより、良き一日を過ごすことができ、ありがとうございました。

例会に参加して

小池 美幸

今回は新緑の清々しい学習院百周年記念会館で、アカデミックな雰囲気包まれて、例会が催された。先輩が「俊友会」という学習院大学を中心とするオーケストラの団員であったので、一階のホールにはよくお邪魔した。特別団員に皇太子殿下がいらして、お忍びで夜の街へ団員の方々と共にお出掛けになるお姿をお見掛けしたこともある。

この日も会の午後の部が始まる頃、演奏を終えられた団員の方々が一階のロビーに集まり、皇太子殿下が丁度お帰りになるところだったようだ。

四階の会場に着くと、地図や資料で壁が埋め尽くされ、渡辺事務局長と斎藤先生が会員の方々に地図の説明をなさっていた。資料を受取り吸い寄せられるように学習院中図の八枚に見入った。時代の隔たりを感じさせない、内容豊富で詳細な記入に驚かされた。

佐久間先生の「忠敬と間宮林蔵の師弟の絆」のお話では、忠敬先生が孫の教育の仕方を見聞に相談する書状があり、林蔵は弟子であるが、忠敬先生は尊敬もして、孫を心配する人間味溢れるエピソードも披露された。

藤岡先生は、折衷尺の話をされるので、物差しのような堅い内容かと思っただが、物差しの模型をつくってこられて、実に分かりやすく、講談を聞くようで楽しかった。

武田先生はお得意の天文分野で、「仏国曆象序妄」のこと、またケプラーの第三法則をご子息と実際に計算なさったお話をされた。余談になるが、「多摩市民塾・新しい伊能忠敬像を探る」の第一回で講師をつとめられ、忠敬先生の生い立ちから高橋至時へ入門の頃までの興味深い御講演をされたが、この日は限られた時間で心残りであった。

研究会では一段と人の輪が広がり、渡辺事務局長の人脈の広さと行動力に感嘆させられる。何か目に見えない力で、終着駅のない線路を走らされているようだ。

今回はこれからのイベントに関係する、スペシャルゲストの方々がおいでになった。伊能忠敬展・映画と演劇・歩け歩けのキャラバン隊などの計画を聞くうちに、期待に胸が膨らんでいた。俳優座の古賀社長は入院先から杖をつかれてのご参加、その情熱に心を打たれた。

今回も会を盛り上げてくださった伊能ご夫妻、睡る間もなくレジュメを作成してくださった斎藤先生、懇親会でも何も召し上げらずに司会にお忙しかった清水先生等のお姿が印象的であった。

熱意溢れる会員の方々の勢いは、とどまるところを知らない。人と人との出会いがきっかけで、様々な企画が誕生し、その中から「新しい忠敬像」が生まれてくる。

これから益々目が離せない、伊能忠敬研究会である。

長崎街道まちづくり推進協議会設立一周年記念 長崎街道交流フォーラムに参加して

伊能 陽子

六月三日「長崎街道切手」発売とあわせての記念シンポジウムが、北九州厚生年金会館で四五〇人の参加者を得て盛大に開かれた。テーマは「東と西の交歓・伊能忠敬と長崎街道」、佐原市教育委員会青木司氏、当研究会渡辺一郎、伊能陽子がパネラーとして招かれた。

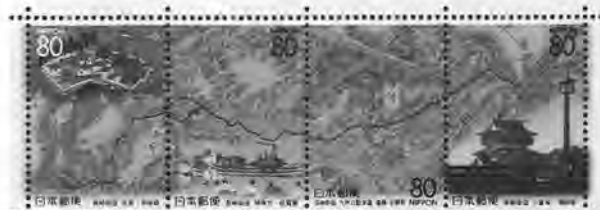
伊能図を基本にデザインされた切手を、大きなパネルに拡大して舞台が作られてあり、生まれて初めての大役が務まるのか不安だったが、研究会でお馴染みの河島さん、松尾さんの笑顔を見つけてほっとする。

コーディネーターは、推進協議会副会長の村岡氏、小城羊羹（佐賀県）の老舗の四代目である。

文化の入り口だった長崎街道の歴史を改めて見直し、その感動と誇りをこれからの街づくりに活かしたいという熱気が伝わり、渡辺さんの調子も普段に倍増していたようだった。

佐原市の歴史的建造物を大切に作る街づくりの話は青木さん。私は無手勝流の刺身のツマのつもり。地域資料の掘り起しの協力をお願いしてお役を果らせて頂いた。

長崎街道（長崎県・佐賀県・福岡県） 九州-26



初めての記念館と源空寺

首藤 郁夫

一、伊能忠敬記念館

伊能忠敬記念館を訪ねたのは、随分以前のことになります。当時発足したばかりの関東支部（日本科学史学会の）の行事として、「伊能忠敬史蹟を中心とした佐原」の見学会がおこなわれました。記録によると、一九六一年（昭和三十六年）六月二十八日のことです。その一日はど前の六月一七日には支部例会が開かれ、金関義則氏「利根川水系をめぐる開発の諸問題」、今野武雄氏（故人）「伊能忠敬と佐原」、饗庭三泰氏「中学校教科書における伊能忠敬の取扱いについて」、飯田賢一氏「佐原の郷土産業について」の講演があり、見学会の予習といったかたちで、出来て間もない時期の緊張した雰囲気と熱気がしのげられました。

さて見学会当日は梅雨のさなかで、落雷停電があり、千葉駅九時集合が三〇分ぐらいおくれるハプニングがあり、結局八名が参加しました。開館間もない記念館は、当時としては予想以上に立派に見えました。佐原市教育委員会の大竹章氏（醸造技術史の専門家）のお世話で、一般には非公開の書籍や地図などをかなりくわしく見ることが出来ました。それなりの成果を得たと思います。私は記念に絵はがきを求め今も大切に保存しています。

その後もタクシーに分乗して牛深の清水屋で昼食に川魚料理を賞味し、鹿島神宮に参詣、ナマズの頭をおさえて地震をとめている要石（かなめいし）をみたり、増水の利根川を眺めて佐原にもどりました。三十六年前のことで記憶もうすれ勝ちでしたが、記録が残されていたので助かりました。

二、源空寺

朝日新聞に蘭学資料研究会で高橋景保（一七八五―一八二九）没後

一五〇年の墓前祭を行なうという予告記事を見たので、参加することにしました。一九七九年（昭和五十四年）二月一七日のことです。

当日は土曜日でしたが、週休二日制以前のことで銀行は午後二時までが勤務時間でした。折悪しくその日の午後は部長との人事面接が予定されていました。早く切りあげてほしいとの思いが通じたのか、時間内に終わったのを幸い地下鉄「三越前」から「稲荷町」へ出て、予め調べておいた源空寺へ篠つく雨の中を急ぎました。

寺の玄関に入ると（現在のお寺は建て替えられて以前の佛とはすっかり変わっています）。つきあたりの壁（内側は手洗いでした）の横手から小柄な老人が出てきました。林家正蔵（のちの彦）師匠でした。「師匠は蘭研の会員ですか」との問いには答えず、「お経が始まるから一緒においで」と左手の階段を付け人と私をとまって、ゆるゆるとあがりました。本堂には多勢の方が集っておりました。中央には写真で見おぼえのある緒方富雄先生がすわられて「この寺の宗旨は何宗かなあ」と話しあっておられました。

間もなく坊さんがあらわれ「阿弥陀経」の読経が始まりました。三〇分程で終り、通りをへだてた墓地に集りお参りをしました。いつの間にか雨はあがっていました。

景保はシーボルト事件で罪をとわれ、入牢中になくなり、父至時や隣りの伊能忠敬の墓とは少し離れて墓地の入口近くに淋しく建てられていました。時代が移りこの日の墓前祭に多くの人々に供養されて、草葉のかげで喜んでいることでしょう。

お蔭でこの日始めて私は忠敬先生とその師至時先生の墓まいりが出来ました。又江戸時代の絵師谷文晁や、歌舞伎や講談でおなじみの幡随院長兵衛の墓をおがめたのも、墓前祭参加の余徳だったと思います。蘭研の方は寺へ戻られましたが、私はそのまま帰路につきました。

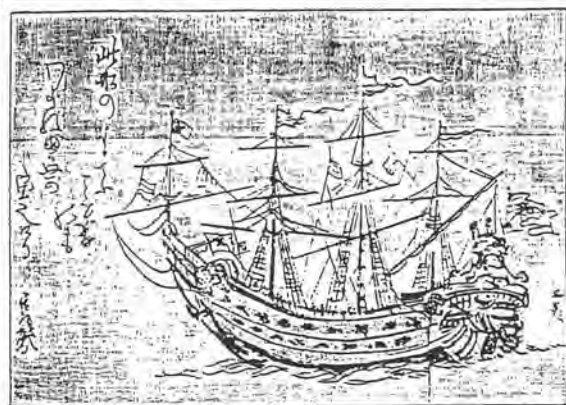
二月の冷たい夕風は身に沁みましたが、西の空は明るさを増し春近しと思いました。

昭和八年度版

小学国史の教師用

教科書

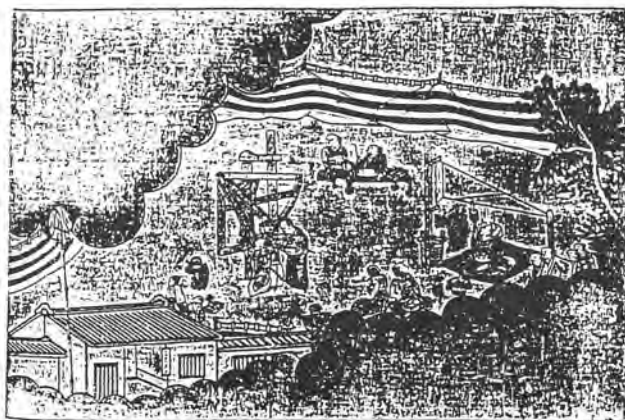
(白根貞夫氏提供)



松平定信の船の題

寛永鎖國後外國の公に通商を求めたる始なり幕府これを許さず、長崎に到ることを論して歸らしめしが、これより俄に國防の必要を覺り、まづ老中松平定信をして房總豆相の沿岸を巡視せしめたり。ついで近藤重藏(守重)幕命を奉じて蝦夷地を巡察し、高田屋嘉兵衛を嚮導者として擇捉島に渡りて探検を遂げ、土民を懷柔して開發を企て、露人の建てたる標柱を仆して我が國標を建てたり。その

頃伊能忠敬も公命を受けて蝦夷地の海岸を實測せしが、忠敬夙に西洋の學術を習ひて、推歩測量の精確當時無雙といはれ、これより全國に亘りて測量製圖の大業を成しぬ。
既にして露國は、更にレサノフ(Kesauov)をして我が漂流民を伴なひ國書方物をもたらし、長崎に來りて通商の約を結ばんことを請はしむ、幕府はその國禁たるを告げて拒絶せしかば、彼はこれを怨み、しきりに樺太擬



伊能忠敬の測量

伊能家文書紹介五 その一

伊能図のプロモーターたち 安藤 由紀子

二人の大阪人

高橋至時^{タカハシ トキ}と間重富^{マヅミ}

伊能忠敬の年譜をたびたび目にする私にとって、どうしても腑に落ちない、不思議な年次が二つある。寛政二年と七年である。まず、寛政七年から話を始めよう。

寛政七年は、不思議な巡り合わせの年であった。三人の優れた人間が、江戸下町で運命的に出会ったのである。改暦の必要に迫られた幕府は、当時の江戸の天文方には荷が重すぎるのを知って、大阪の民間学者で、西洋暦法の第一人者麻田剛立を招聘した。彼は老齢を理由に高弟高橋至時と間重富を推薦し、二人は早速江戸に下り「寛政の改暦」を行うことになった。

高橋至時この年三十二才、大阪定番同心。微禄困窮の中にあつて、公務の余暇に麻田流西洋暦法を極め、師を凌ぐ学力を身に付けていた。間重富この年四十才、大阪の屋号「十一屋」という質商であった。算法・暦法に優れ、資力もいささかあり、ユニークな発想で観測機器を次々に造り出した。

こうして、二人の大阪人がこの年江戸を目指し、下総からやって来た名主・酒造家、五十一才の伊能忠敬と出会ったという訳である。事を起こした人々がなぜ大阪人なのか、なぜ下層御家人の、しかも武官なのか(坂部貞兵衛もそうであったように)、なぜいささか資力のある質商や江戸近郊の酒造家なのか。面白いテーマである。

三人が動きやすいようにするため、幕府は精一杯の待遇を与えた。同心高橋至時は一躍天文方となり俸禄百俵(後二百俵)、質商間重富は暦局御用として苗字帯刀も許され、大阪に屋敷を与えられた。後に酒造家伊能忠敬は、小普請組十人扶持の幕臣に取立てられた。しかし、成し遂げた仕事のわりには、どれもささやかに思える。

それはさておき、この三人が出会った順序を示しておこう。四月、至時は江戸に着き暦局に入る。五月、忠敬は深川の隠居宅に入り、多分直ちに至時に入門。六月、重富が暦局に入る。寛政七年、わずか三か月の間に、三つの「こま」が揃ったのである。

この「こま」の揃い方には偶然とは思えない、なにか不自然なところがあると、以前から心にかかっていた。勿論忠敬は隠居前にすでに「授時暦法」を修め、暦学を学ぶなら大阪の麻田流天文学家たち以外にないと、心にきめていたと思うが……。

今度幕府に招聘されて至時と重富が江戸に来る事を、いったい忠敬は誰に聞いたのだろうか。正式の幕命は、直前の三月だったのに……。また当時紹介状なしに入門する事はいえなから、その労をとった「要の人物」は、誰だったのだろうか。

ミッシング・リンク

お信さんと桑原隆朝

さて寛政七年はこのくらいにして、五年前の寛政二年に移ろう。年譜の中で、一番腑に落ちない唐突な感じの項目は、「寛政二年、仙台藩医桑原隆朝の長女信を継室とする」というくだりである。この年最初の隠居願いを出し、忠敬のまなざしは江戸に向けられ始める。今まで常陸・両総にとどまっていた縁戚関係が、一挙に仙台迄広がってしまい、おまけに仙台藩医ともなれば相当な御家柄、当方はいかに

名家とはいえ田舎の名主、四十六才、再婚である。

そのものズバリの資料はないが、この桑原隆朝という人物こそ、先に述べた要の人物ではないか、という仮説を立ててみた。この人については今まで、仙台藩医で忠敬の二度目の妻「信」の父親、ということとだけしか分かっていなかった。信は五年前に結婚し、この不思議な寛政七年の三月、父隆朝の家で亡くなっている。忠敬は妻の死後二か月で江戸に出た。彼女の墓は佐原にあるから、多分お葬式のと間もなくのことである。お信さんは初めから体が弱く、忠敬は腫れ物にさわるように大切に扱っている。それでも忠敬の書簡によれば、たった五年間だが、佐原での彼女はけっこう良い奥さんだったらしい。

桑原隆朝について、大谷亮吉氏は次のように述べている。「隆朝は、その職業上しばしば幕府頭官の門に出入りし面識の士多く、他日忠敬が蝦夷地測量を企図するに当たりて、当局者の意向消息を探知し、忠敬の為に有力なる顧問となり……(中略)ただ惜しむらくは、桑原氏の閥歴詳らかならず。又忠敬が最初、如何なる関係によりて桑原氏と姻縁を結ぶに至りたるか、を明らかにすべき文書の存するものなくして、十分にこの間の事情を詳らかにすること能わざるを」。又小島一仁氏はこの結婚について、「忠敬が、新しい人生に踏み出そうとした気持ち、一つのあらわれであったかもしれない」と書いておられる。これらを読んで私は、この結婚には何かがあるな、と思った。

資料を丹念に読んでみると、江戸での忠敬の生活は、妻の死後にもかかわらず、岳父桑原隆朝を抜きにしては考えられない。年末年始の挨拶、測量出立前の暇乞い、帰着後の報告は、桑原家と天文方御役所へほとんど同日に行われる。前回測量の地図が完成すると、まず桑原宅へ持参して内見させてから天文方へ届ける。測量中、師至時宛の報告書簡が桑原氏経由で出されることさえあって、享和元年木更津から

の書簡は、「桑原翁より御達し、落手拝見」と至時の返書にある。

資料一 伊能忠敬江戸日記 文化四年十二月

十二月十七日 此日、大図小図共出来上ル。

同十八日 四ツ半頃地図持参、桑原二行、内見為致、夫より浅草御役所ニ相渡ス。(中略)

同廿六日 晴曇。四ツ後より桑原へ行、夫より浅草二歳暮二行。

図書館で「宮城県姓氏家系大辞典」の桑原四家の中に、桑原隆朝氏をみつけた。「仙台藩家臣に菅原姓で、桑原五郎太夫親福を祖とする桑原家がある。医師。四百石。(中略)如璋は医术を学んで伊達綱村に仕え、天文五年に番医となる。伊達宗村の代に奉業となった。子の養純(のち純)の跡は子の隆朝、如則が文化七年に家督を継いだ(後略)」とあって、代々隆朝を名乗っている人のうち、養純(のち純)が伊能忠敬の岳父であり(文化七年没であるから)、同僚の大槻玄沢の日記によれば、一二〇人もいる仙台藩医の中でも上級の江戸定詰の医師で、仙台藩下屋敷の裏手、大工町に住んでいたことが分かった。忠敬の隠居宅(黒江町)は目と鼻の先で、隆朝氏の家作の可能性もある。要するに桑原隆朝氏は、大物だったのである。

ここで、さきに引用した大谷氏の文章を思い出してほしい。「幕府頭官に面識の士多く……当局者の意向消息を探知し……云々」とあった。

大谷氏がこう判断された基の資料は、「伊能忠敬測量日記」にある。寛政十二年第一回測量を前に、紆余曲折あって幕府の許可はなかなか下りない。「三月廿一日、大工町へ出向いたところ、桑原大人の仰せられるには、蝦夷御用の件、御上はもう御決めになっているのだが、蝦夷地では測量器具の運び手が確保出来ないという理由で、最終決定

に至っていないとのこと」との情報を得ている。

又、出発がほぼ決定した一か月後の四月二十七日、すっかり安心した忠敬は桑原宅へ行き、次回は引続き関東・東北の東海岸を測量したいと早くも次の計画を打ち明けている。すると隆朝氏は、『高橋公と相談し、書類にして持っておいでなさい。御内覧に入れる機会もあるでしょう。口上では通し兼ねるものです』と仰せなので、高橋家へ伺い、お指図をうけ「翌日、宛名のない上申書を書いて大工町へ持って行く。隆朝氏に『これでは分からない。方位測量術の説明をつけたらいい』と言われ、絵図にして置いてきていたのである。

この上申書に宛名はないが、はたして誰の「御内覧に」入れたのだろうか。幕閣中、天文方を支配するのは「若年寄」である。この頃の若年寄は、井伊兵部少輔直朗・京極備前守高久・堀田摂津守正敦・立花出雲守種周の四人であった。資料によれば、寛政十二年から文化十四年までの間ずっと、伊能忠敬の測量と地図作りを統括した閣僚は、堀田正敦であった。

仕掛け人

堀田摂津守正敦

伊能忠敬没後、残された者たちの手で日本全図が完成し、幕閣に披露、献上された。文政四年七月十日江戸城大広間では、大図二二四枚のうち京都より西の部分、中図八枚、小図三枚の「大日本沿海輿地全図」がつなぎあわされ、老中・若年寄九名の前に広げられた。もちろんその中に正敦もいた。地図のこちら側にいて平伏していたのは、天文方高橋景保、伊能忠敬の孫忠誨と制作担当者たちである。

資料 二 伊能忠誨自筆日記 文政四年七月 [記念館文書]

十日 曇天。五時過、下河辺・永井・門谷・吉川・予、大手ヨリ御申之ユエ、行ク。高橋先生ヲマツ。先生来り、程ナク大広間エ。京ヨリ酉之方、大図十四卷開キツグ。中図、小図又ツグ。御老中・若年寄御ラン被遊、又諸卷巻キ納メ、御目付衆ヘ伝言シテ、諸箱ヲ置キ帰ル。八半時過、帰宅。

ここで「大手」と呼ばれている人こそ、堀田摂津守正敦なのである。彼は大手門外に住んでいたもので、いつも「大手侯」と呼ばれた。十八年間、測量隊の不屈の闘いを見てきたこの若年寄は、晴れの披露の席に、忠敬の子孫と担当者をぜひ呼びたいと思ったのだ。

さて調べてみると驚いたことに、この堀田正敦も又仙台の人なのである。彼は宝暦五年伊達藩六代藩主宗村の八男に生まれ、三十二才の時近江堅田一万石の堀田家の養子となり、寛政二年に若年寄に就任した。三十二才までの彼は江戸の仙台藩邸に長く住んだであろうし、したがって、わが桑原氏が彼の脈をとったこともあるだろう。隆朝は藩主、夫人、公子・女を診察したと資料にあり、後に長男如則は、正式に正敦の侍医になっているから。つまり、忠敬の上申書を「御内覧に入れた」幕府頭官は堀田である、と断定してさしつかえないと思う。

大阪の二人の学者を招聘したのも、天文方を統括していた正敦であろう。そして伊能図の仕掛人が堀田正敦であるという推測をほぼ確実にするのは、まさに、彼が仙台の人であったという事実なのである。

ロシアの南下

どうやら震源地は仙台にあるらしい。忠敬の回りに「こま」の揃った寛政七年の翌年、仙台藩では正敦の甥である藩主が没し、わずか一

才の当主が残された。正敦は、伊達六十二万石の藩政補佐となり、次々に若くして藩主を失う仙台藩の面倒をみた。

この頃幕府と仙台藩は、難問を抱えていた。蝦夷地問題である。ロシア帝国の南下という差し迫った状況の中で、仙台では工藤兵助、林子平、大槻玄沢など、真剣に日本の進路を考える人々が輩出した。

(因みに工藤兵助の妻は桑原隆朝の姉であり、大槻玄沢は、工藤の推薦で支藩から仙台本藩の藩医になった)

次にロシアの南下と、この稿に登場した人々についての年表を見ていただきたい。

天明三年 仙台藩医工藤兵助『赤蝦夷風説考』を書く。

六年 大槻玄沢、工藤の推薦により仙台藩医、江戸詰となる。

寛政二年 堀田正敦、若年寄になる。伊能忠敬、江戸詰の仙台藩医桑原隆朝の娘「信」と結婚。

三年 仙台の人林子平、『海国兵談』を刊行。

四年 ラクスマン、漂流民大黒屋光太夫を連れて根室に入港。

六年 大槻玄沢、「オランダ正月」を祝う。

七年 高橋至時・間重富、暦局に入る。伊能忠敬隠居、入門。

八年 堀田正敦、仙台藩補佐となる。

十年 幕府、蝦夷地に大調査隊を派遣。その一部を直轄とし、蝦夷地御用係りの体制を整える。

十二年 忠敬、蝦夷地御用掛りの下で第一次蝦夷地測量を行う。

文化元年 レザノフ、仙台藩漂流民を連れて来る。

四年 ロシア軍人エトロフ島略奪。仙台藩出兵命ぜらる。蝦夷地全域幕府直轄。若年寄堀田正敦、蝦夷地出張。大槻玄沢長子玄幹、桑原隆朝長子如則も随行。仙台藩との関係

もあり、堀田は実質的な対口責任者になった。藩命によ

り玄沢、仙台藩漂流民の聞き書『環海異聞』を提出。

七年 高橋景保、幕命により世界地図作成、提出。

八年 グロウニン逮捕。玄沢、天文方に出仕、景保の下で『シヨ

メール辞書』の翻訳に従事。

十一年 伊能忠敬、最後の測量から帰り、桑原養好(如則)の邸

跡へ移転、地図御用所とする。

分子構造を見るように人々がつながりあって、幕末に向かってゆくりと動いている。寛政十年と十二年の所をもう一度見ていただきたい。幕府は蝦夷地のことで頭がいっぱいで、このことがなかったら忠敬に測量の許可が下りたかどうか分からない。蝦夷地の一部直轄が決まった時、幕府は「蝦夷地取締御用係」を編成した。若年寄管轄下の御書院番頭松平信濃守忠明(役高四〇〇〇石)、御目付の羽太庄左衛門(同一〇〇〇石)など五名を、各部署から出向させたのである。そして忠敬の第一次測量は、この「蝦夷地取締御用係」の監督下で行われることになった。寛政十二年三月晦日、蝦夷地係りの目付羽太庄左衛門の前に呼び出された忠敬は、次のような誘いをうけたというから、きっと目を白黒させたに違いない。

「そこもとは村に仁情いたし、よく人に施し、学問才覚もあり、村方の取計らしいも宜しいと聞いている。領主から褒美などもらっているか。(忠敬、はい、いただいております、と答える) 蝦夷地は広く一年や二年春夏だけの測量では、とても行届かないだろう。村に仁情いたし、領主にも貢献しているのだから、今までの村方取計らしいの経験をいかし、これから七年間蝦夷地へ定詰し、蝦夷人を化育し、人道も教え、田畑も開かせれば、天下に対し莫大な功績をのこすことになる(住み込んで、蝦夷人を化育しながら測量もさせたいということか)。このことは松平信濃守さま初め蝦夷地掛り一同相談の上、そこもとに

頼んでみることにした。引受けてくれないだろうか」。

忠敬氏は、次のように答えた。「まことに有難き仕合せでございますが、御覧の通り虚弱の性、寒国に七年間の定詰は不安です（測量の許可が下りないと困るので、五才も若く申告している彼としては、老齢のため、と言えないところがおかしい。忠敬氏も必死である）。それに蝦夷地のことは何も知りませんので、今度かの地へ参り北極高度など測量し（つい本音が出てしまった）、様子をよく見届けてからにしたいと思います。（至極尤も、と羽太氏は頼みを引込めた）」

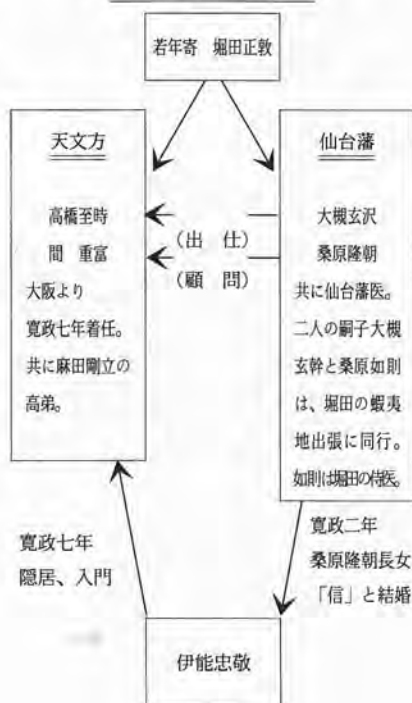
ロシア帝国との緊張が伊能図に与えた影響は、限りなく大きいと言わなければならない。

残された謎

この仮説に基づいて、伊能図の五人のプロモーターたちの関係図を作ってみた。これで無理なく回路が繋がった、と言えるのではなからうか。次回から一人ずつくわしくとりあげてゆくつもりである。

仮説が正しければ、『お信さん』こそが、伊能図の「キー・ワード」なのだが、「どうして彼女が身分ちがいの忠敬の後妻になったのか」という点は、いぜん謎のままである。しかしいづれにせよ伊能忠敬は、女性によって次々と運の開けた幸運な人だったといえる。伊能みちさんのお婿さんになって家産をふやし、お信さんとの再婚によって、歴史の流れの真ただ中に登場し、大きな仕事をやってのけたのである。お信さんの死後、お栄さんという内妻まで現れて、短い間だが地図作りを助けた。師高橋至時^{ヨシトキ}は彼女の才女ぶりに言及して、間^{ハズレ}重富宛の書簡の中に、「勘解由は仕合わせもの」と書いているが、至時ならずとも、だれもがそう思うだろう。

堀田・桑原・伊能関係図



参考文献

- (1) 大谷亮吉著『伊能忠敬』・小島一仁著『伊能忠敬』
- (2) 高橋至時書簡（伊能忠敬記念館文書 84-2-19）
「伊能忠敬江戸日記」（学士院写本）
- (3) 『宮城県姓氏家系大辞典』 角川日本姓氏歴史人物大辞典・④
大槻玄沢『官途要録』 早稲田大学出版部（影印本）
- (4) 『伊能忠敬測量日記』 千葉県史料・近世編
（伊能忠敬記念館文書）
- (5) 『伊能忠敬自筆日記』
- (6) 『国史大辞典』吉川弘文館・『仙台市史』（仙台藩の第一次蝦夷地警固）・『伊達世臣家譜』（これらは仙台市博物館の荒井聡氏・市民図書館の渡辺洋一氏に御教示をいただいたものである。）
- (7) 『大槻玄沢の研究』 洋学史研究会編 工藤兵助と桑原隆朝の姉との間の長女は只野真葛であり、『むかしばなし』（東洋文庫）に、叔父の詳しい人物評がある。
- (8) 『伊能忠敬測量日記』（既出）

つく嶋

伊能 陽子

不知火の海は青く、穏やかに輝いていた。「つく嶋」「つく嶋」と、春頃から何度口にしたことだろう。そのつく嶋を尋ねて、とうとう熊本県八代まで来てしまったのである。

地図の八代海には、無数の小島が浮かんでいる。天眼鏡で追っても、その名はなかなか見つからなかった。「大築島」「小築島」とあるのが、「つく嶋」だろうか。八代の観光協会に電話で問い合わせしてみた。若い女性の声から何度か変わった後「こちら図書館ですが」と年配の男性の声に。「八代と天草の間に築島という島があります。いえ、誰も住んでおりません。え、江戸時代のことですか。史談会の方をご紹介しますか」。丁寧に敬礼を述べて、慌てて電話を切った。二カ月ほど前のことである。その時は、この目で見られるなどと、夢にも思わなかった「つく嶋」。

測量隊が、目的地で実際に測量の作業を始めるまでには、いろいろな手順があった。幕府から出された触れ書きが藩主、代官などの手を経て各町村へ伝えられる。そして測量の

参考にするため、その地のおよその様子、石高、家数など、また絵図面を提出するよう要請される。さて、絵図面を描くとなれば先ず問題になるのが境界線である。毎日の暮らしの中で、触らぬ神にたたり無しと、素知らぬ振りをしていた所をはっきりさせねばならない。測量隊の行くところ、各地でこの境界線が原因で、大なり小なり騒ぎが起きたのも、当然のことであろう。

その一つの主役が、「八代郡植柳村つく嶋」であり、「天草郡阿村つく嶋」であった。

史料一

A五九一（世田谷伊能家文書）

演述

八代郡植柳村

つく嶋

右嶋は、従前々

細川越中守領海之嶋ニ御座候

近年、長崎御用之煎海鼠

納方出増之儀、御達付ては

右嶋近辺にて、専、海鼠漁

仕候処、村方より海中相隔

不弁利ニ付、漁師共、嶋ニ相滞候

用意ニ、仮ニ小屋等取立、手入

仕候処、右嶋は天草郡

阿村懸り秣場之嶋ニ候を

如何にて、手入之御取計仕候哉

様子承度段大矢野組

大庄屋より申立候、然処右

嶋之儀は、正保三年肥後国

絵図

公義え差上候節、当領分之

嶋ニ付、絵図ニ書上、其後

元禄年中、諸国絵図

御改之節も、同様書上

延宝九年より、寛政元年迄

追々、御巡見様御通行

之節も、当領分之嶋ニ

書上、寛政七年、当領内

海辺村名嶋々共、書上候様

従

公義、御達之節は、当領之

嶋ニ書上置、右等之証拠

を以、当領之嶋ニ紛無御座候

松平主殿頭様、当時

天草郡御預所之儀ニ付

彼方御役人え、及懸合候処

右此方、証跡を以、追々村方

取調ニ相成候由、尤、当時

懸合内之儀ニ候得共、彼方ニても

右つく嶋之儀は、従前々

阿村支配仕来候段、村方より

申立候得は、此節、測量方

御役人衆えは、御預所内

之儀ニ付、書出ニ相成候由

申来候、右之通、当領内之嶋ニ
顯然之事ニ付、今度測量

御用、周廻之丁数、高低等

相改書上可申候得共、嶋原表

懸合内之儀ニ付、先、下改は

見合置、絵図帳面ニは

前例之趣を以、調置申候(後略)

細川越中守内

九月 池部長十郎

『右の島は以前より、細川越中守領海の島でございます。近ごろは、長崎からのお達しにより、この島近くで海鼠(なまこ)漁を致しておりますが、村から海へ遠く不便です。で、漁師たちは島に滞在するために仮の小屋を建てましたが、つく嶋は天草郡阿村の秣場の島なのに、どうしてこのような事をしたのかと大矢野組大庄屋から申ししてきました。しかしこの島は、正保三年、肥後の国絵図を公義へ差し上げる時に、私共の領分ですから絵図に書き込み、その後元禄の諸国絵図改めの時も同様に書き、延宝九年から寛政元年まで次々ご巡見様がご通行の時も、私共の島として書き、寛政七年当領内の海辺村名島々など書き上げるようにとの公義ご命令の時は当領の島に書きました。これらの証拠により私共の島に相違ございせん。

現在、松平主殿頭様が天草お預かりなので

あちらのお役人へ掛合いましたところ、右に述べました当方の証拠によって追々村方取り調べなさる由、現在話し合い中とのこと。右の通り、明らかに当領内の島ですから、測量御用のために、周辺の距離や高低など調べるべき所ですが、島原で掛け合い中ですので下調べは先ず見合わせ、絵図帳面には前例の通りに致します。(後略)』

史料 二

A五九二(世田谷伊能家文書)

口上

当郡阿村、津具嶋之儀、右村百姓重々之秣場にて、村絵図面等ニも差分居、往古より支配致来候嶋にて御座候処去ル寅年、八代郡植柳村より不計、右嶋之内え仮屋を取建候段、阿村百姓共より訴出候ニ付相糾申候処、相違無御座、如何様漁人とも、船繋之節、風雨之凌、暫時之仮屋ニ、取捨候儀ニても、可有御座と、奉存候得共彼地役人中え、懸合遣候処於彼方も、証拠用之品有之趣を以、植柳村内之嶋ニ相違無之段申立、双方及

論合、無拠、御支配富岡

御役所え申達、肥後表

御掛合ニ相成候処、彼方よりハ

植柳村嶋ニ相違無之旨

申出候趣を以、阿村之方

前々より心得筋之儀、御糺

ニ付、当嶋右取調ニ相成居

未落着不仕候、然共、右嶋之儀

前々より、阿村支配仕来候

儀ニ付、此度差上候絵図

面、津く島周廻之儀も、得と

内改仕、可申上儀ニ御座候得共

右、御掛合中之儀ニ付、一通

見積を以、書上申候間、御

勘弁之上、宜、御測量被成下

候様仕度、此段、奉申上候以上

天草郡大矢野組大庄屋

午 十月

吉田長平 印

『天草郡阿村のつく嶋は、百姓代々の秣場で村絵図面にもあり、昔から支配してきたものです。しかるに去る寅年、八代郡植柳村で、思いがけずこの島に仮小屋を建てていると、阿村の百姓共が訴えてきましたので、調べてみるとその通りでした。多分漁師共が船をつないで、風雨をしのぎ暫く休むために作ったものと思われまふ。』

あちら側の村役人へ掛け合いましたところ、証拠の品があるので自村のものに違いないと申し立て、双方言い争いになりました。

仕方なく支配の富岡御役所へ申し上げて、熊本藩へ掛合って頂きました所、あちらも植柳村のものに相違ないと申される由で、御役所では私共の考えを糺され、いまだに決着しておりません。

しかし右の島は、私共の島なのですから、本来なら、今度差し上げる図面は、島の周囲もよく改めてから差し出すべきなのですが、右の次第で決着していませんので、一通りの概算で書上げを致しました。お許しの上、宜しくご測量お願い致します。以上』

どちらの村も、以前からつく嶋を利用し、漁師たちにとっては大切な場所であつたらしい。海鼠は不知火の名産だったのか。それにしても、伊能測量隊が要請する以前に、何度も絵図面を作ってお上に提出しているのに驚いた。そしてその度に、この問題が起きたであらうに、一五〇年以上の間（正保三年（文化七年）相変わらずなのは、と思ったのだが。伊能忠敬記念館に送られて来た地方資料の中に興味深い一文がある。役所から大庄屋にあてた通達の写しと思われるが、その一部を紹介する。

☆ 天草郡中御測量方ご巡回日記

上田家文書より

（前略）村により境等認方差支候処も可有之哉に被存候、有体之所は、其訳測量方へ達後歳之差支に不相成候様、取計可申候に付、其心得を以事立不申様、程能取計可被申候、右に付ては、此度差出候書付、村内間数境目等の義は、及後年取用候儀、決て有之間敷候是等之処相合勘弁を以、呉々事立不申様可被致候（後略） 佐久間達夫氏解説

『（前略）村によって、境界などの認め方が違う所もあらうが、その訳を測量方へ報告した後は面倒にならないようにするので、そう承知して事を荒立てぬよう、ほどよく取り計らうように。右については、今度差し出した書き付けの村の距離とか境界の事などを、後々持ち出してはならない。これらの事を含んで、くれぐれも事を起こさぬよう。（後略）』

当時このあたりの支配は天領、譜代など入り組んでいて、何事も穏便にと、お互いにもめごとを起こさぬように気を使っていた。

測量隊の巻き起こした嵐の中で、日頃反目の激しい所では、一気に火を吹くような大事件が起きた例もあるが、ここ「つく嶋」では、今まで通り海の恵みを得、自然に従っての生

活に戻ったのだと思う。一事を荒立てず、程よく取り計らって。

伊能中図には、はっきり「築島」と記載されている現在の八代市築島は、一時は小学校まであったそうだが、石灰の採掘によって目の前の島は二つに割れたような、無残な姿になっている。いずれ整備され、レジャーランドに生まれ変わる計画もあるらしいが。

八代と天草間を往復するフェリー船上で、近づきまた遠ざかる「つく嶋」の、昔は緑溢れていたという面影を想像しながら、測量隊もこの海を渡り、あの山々を眺めたのだらうと、何かが時を越えて響いてくるのを感じたことである。



阿村と植柳村間のつく嶋（大築嶋）

伊能測量の地域史料

鯨と五島と伊能忠敬

岡本 暉子

対馬での測量を終えた第二次九州測量途上の伊能隊は、平戸領田助浦を経由して宇久島の平村に到着、ここを起点として五島の測量を開始した。

周知のごとく五つの本島と一四〇余の属島から成る五島列島は、その島の数もさることながらいずれも海岸線が複雑で、かつ到るところ断崖絶壁の島々であるため、それらを正確に測量してまわるのは当時の技術や装備をもってしては非常に困難であったろうことは容易に推測できる。事実、忠敬の「測量日記」には「壁立」、「大絶壁波高船難寄」、「今日は終日大巖石也」などといった表現が随所に現われる。

一方、測量日記や忠敬の作成した地図には、五島に関する部分に限らず全般的に、山、川、岬、浜、それに村落や社寺などが、その名とともに驚くほど詳細に記載されている。もとより忠敬が初めからそれらを知っていた筈もなく、測量に際して「津々浦々の地名、呼び名、遠くに見える山の名などをよく知っている」(奈留村庄屋山本家文書、傍点筆者・注一)案内人が常に付き添っていたからこそである。

(注一) 浦々地名下々名并遠山見渡之名能心得候ものニ無之

では案内不相成由

また測量には人足が必要だ。奈留村では一五才から六〇才までの村人全員が狩り出されている(山本家文書・注二)。これらの人々にはなにがしかの日当が支払われたであろうが、農耕漁労など日頃の生業をかなぐり捨てて、村をあげて測量に参加せねばならなかったこと、

いずこの村にとっても測量隊の滞在はまことにもって迷惑千万であつたろう。

(注二) 村方よりは惣島中十五より六拾迄人残り無之夫方差

出候

争いの種、鯨

ところで当時、五島とその近隣は最盛期はすでに過ぎていたものの、捕鯨の盛んなところであった。平戸、大村から五島にかけて数多くの鯨が姿を現わしていたようだ。測量日記にも「宇久島(中略)鯨組の納屋場、当春大村川棚村浅井多兵衛鯨猟す、不漁にて鯨一本も不取得という」とか「中通村内福江藩領有川村(中略)後浜鯨納屋鯨組は当村代官平田群治、去冬より此春迄鯨十一本取と」など捕鯨についての記録がある。

網による捕獲が主だった当時の五島での捕鯨の中心は有川湾であった。中でも湾を挟んで相對する所に位置する有川村と魚目村が特に力を入れていた。ところがこの有川と魚目は五島藩から富江領として分家へ分知されて二つの領地に分かれ、それ以来鯨をめぐる領界争いが絶えなかった。そしてそれは五島、富江の間だけにとどまらず、大村落や平戸藩も加わった広域的なものとなり、あちらこちらで数多くの紛争が頻発していた。

このような紛争地帯の測量にはいざこざがつきものである。他方、忠敬としてはこのような政治的なことがらに巻き込まれるのは真平御免だったろう。各方面からのさまざまな申し入れに対して忠敬は実に冷静、慎重な対応をしている。たとえば紛争の地の一つ、つばら島の測量に際しては、五島藩では富江と争っているこの島は測量しないで

おいた方がよいと考えたものの、忠敬にはそうと言う訳にもいかない
ので「ここは私達で測量致しましょう」と申し出たところ（五島藩太
田家文書「経志系図写」・注三）、忠敬は「ここは紛争になっている
所なので私共だけで測量致しましょう。他にも私共だけで測ったところ
があります。人手については五島、富江双方からお借りしますが役
人の方には立会って頂かなくて結構です」と答えている（太田家文書・
注四）。忠敬の測量日記にも同様の記述を見ることが出来る。

（注三）測量方掛合梶島より罷渡、つづら島の儀論所ニ付双
方無改ニ如何可有之哉。於有川、竹子島等も無改
ニて相済候旨伊能申し出候由相達候条、此方より無
と申儀は難申入、此方一手改相成候様可申談旨申付
之

（注四）測量方出張之者共より昨日出之書状を以つづら島之
儀、一昨日申付越候趣ヲ以、伊能へ申談候処、双方
論所ニ付、此度は双方へ不拘、測量方一手ニて相改
人数之儀は双方へ彼衆より借受候所ニ相成候段、久
賀、犬卸山浜方、是以一手改ニて双方役人不立会旨
申越之

今日、日本海に浮ぶ小さな「竹島」や東シナ海の「魚釣島」に対し
て日本と韓国、中国の夫々が領有権を主張している。島とそれを取り
まく海域が為政者にとって重大な関心事であること昔も今も変わらない。

鳴物停止の貞兵衛の死

時と所によっては政治的な情況に気を配りつつ測量を続けていた忠
敬を、測量隊の副隊長であり忠敬が心底より信頼を置いていた坂部貞

兵衛の死が待ちうけていた。五島の測量にとりかかっておよそ半月後
忠敬と離れて日島というところの測量をしていた貞兵衛はそこで病を
得、病状が思わしくないため独り福江に赴いてそこで藩の医療と看護
を受けていたのだが（太田家文書）、その甲斐もなく、福江に滞在す
ること一ヶ月足らずで四十三才の生涯を閉じた。

忠敬は鳥が羽を失なったようなものとひどく悲しみ力を落したが、
それは当然のこととして、注目されるのはこの時の藩の対応である。
その少し前に將軍家斉の子友松が亡くなっていたが、その時と同じ
「遊興鳴物停止三日間」を命じている。（太田家文書・注五）。五島藩
にとって貞兵衛の死は友松の死と同等の重みをもっていたのだらうか。

（注五）今夕右貞兵衛病死之旨相聞候ニ付、為見舞町奉行差
出之。尤取置等之儀は宗念寺へ申付之。右ニ付遊興
鳴物三日間停止申付之。

かくして領界争いに神経を使いつつ、その上貞兵衛の死に遭遇した
忠敬は、その後もなお一ヶ月半各地を測量してまわった後に五島をあ
とにして長崎へと向かった。

先日たまたまテレビで、「五島福江島富江漁港のきびなご漁」とい
う番組を見たが、その時の画面はしかし、かつてこの辺りで熾烈な領
界争いがあったことなどすっかり忘れ去られているようだった。



五島資料・伊能測量隊関係抜粋

1 五島太田家文書

(前略)

一、三月朔日、長崎より罷下候種痘医師有馬永流、戸樂智仙坊宅へ立宿申付之。

三月六日

一、奈良尾乙名瀬向寄へ、勢美鯨一本流寄、東有川代官共立会にて斗之始末、委細用所留帳記。

同廿日

一、種痘医罷下候条、於南河原、足輕共種痘致度相願、差免之。

(中略)

(四月)廿一日

一、宮崎十郎次、宮崎永次郎、松尾求吾、佐々野藤平、荒木龜次、中山仁平へ測量方用掛申付候。

(中略)

同廿七日

一、測量方掛合宮崎永次郎招呼、大宝、津たら嶋境目、のう瀬之方行違有之候間、玉之浦代官申談、与得相改、絵図二差出候様申付之。

同廿八日

一、久賀嶋之内犬卸山、花嶋より改二罷越、相済兼候儀も有之候条、掛合候様、代官瀬久兵衛へ申付之。

五月二日

一、今般測量方廻浦二付て、富江表、福江表境目面倒相起、彼年寄平田徳左衛門立越、

種々面倒筋申出、大目付共掛合にて落着無之二付、家老月番坪内直記面会、境目書付老通相渡候。左之通。

今般測量方就書出、御境目等押付ケ間敷所相見え候段、速御聞、不埒之儀思召候。一鉢御分知一件始終之處は、御代々仰越之儀上にて、寢と御存知被為在、下々にて存候事二無之、猶又、従古来、御書面等有之、追々公辺へ御書出二相成居候處、得と御取札之上、被仰付候間、富江之儀此方御差図通可相心得候。右之趣意は当冬、御参府之上、右膳様御直々可被仰入候。尤、此上得と御取調の上、御差別二相成向も可有之、是又可被為御相談候間、此節之儀は此方御差図通、相心得候様急度可申付旨、被仰付候もの也。

五月

覚

一、津多良

富江領

一、竹之子嶋

富江領

一、久賀かぢやが久良

右は海辺就改、此節不及書出

一、津婦ら嶋

一、中小嶋

一、竹嶋

一、二子嶋

右嶋々先年より此方海面にて、御

差出顯然候間、此節も書出二相成

候。

一、桐瀬

右は申迄も無之、此方御海面にて、平戸御境目、先年より論所、此方御書出二相成候。

右書付式通、平田徳左衛門へ相渡候處、無程又々大目付共へ面談入々懸合、書付預置及退出。委細は、用所留帳記。

同三日

一、目付藤原平磨、測量方為付廻、宇久嶋へ出船申付之。尤、生月迄出張之上、右役人方へ得と申談境目之儀も有之、絵図出来相頼候様、会釈等も相応可致、委細申渡之一条具二用所留帳記。

同日

一、昨日用召之、富江松岡多門左衛門罷越候付、此方家老共及対面、青方弥五左衛門より平田徳左衛門へ之用筋、書付を以申渡候由、猶又富江表政事之儀は、多門左衛門へ申付候旨申渡候處、多門左衛門より入々辞退申出候得共、押て申付候趣申渡之。徳左衛門一儀書付、左之通り

松岡多門左衛門

用人共へ

平田徳左衛門事、存知寄之儀有之候付、役人共へ預置候条、其旨可相心得者也。

五月三日

(中略)

同四日

一、富江より、松岡多門左衛門、平田良平、大久保源藏、梁瀬十兵衛罷越、家老共へ対面、昨日徳左衛門一儀二付、役人共へ相渡候書付之儀二付、入々富江表より願書差出

之。無廻儀も有之候条、願通差免之。則願書左之通

賞

平田徳左衛門事、思召之儀被為在候二付、御役人へ先ツ御預被置候条、其旨可相心得之旨、昨三日松岡多門左衛門并御用人中へ被仰付候御書付之趣、御役人共一統拝見仕、誠ニ以驚入如何至極奉存候。早速右膳様へ可申上候。徳左衛門儀、公辺御勤方を初、御政事方老人へ被御預置候儀二付、必止度御差支ニ相成、殊ニ同人兼て尽忠儀御為ニ相成候。御役人共初、御家中、御領分一統帰服仕居候處、右之通被仰付、御役人共一統当惑仕候。依之此節被仰出候趣、甚如何敷奉存候得共、右膳様ニ対し甚不忠ニ相成候儀二付、御請難仕、御領分之人民も、一統相敷可申、右二付御請御用捨之儀、御役人共一同罷出、御家老中御方迄幾重にも御願申上候。

以上

同六日

一、大坪永蔵へ測量方用之繪図認方申付之。

同十二日

一、目付藤原平磨より、宇久嶋去ル九日出之書状を以、富江表より大久保貢、生月へ直ニ渡海之趣二付、平磨儀も早々生月へ相越、測量方平村へ直横引入候手段之由申越候。

同廿六日

一、藤原平磨より封状、測量方役人為出迎老州へ罷渡相待居候處、去廿二日順風ニて

同所通船相成候条、則跡を慕、平戸領田助ニて右役人遂面会、同廿三日宇久嶋着船二付、使者等相勤め、同廿四日二手ニ相分廻動二付、伊能勘解由方へ平磨、下役之方へ紋助付添之段、其外会釈饗応之次第具ニ申越候。

(六月) 十七日

一、測量方掛合共花嶋より罷渡、つぶら嶋之儀論所ニ付、双方無改ニ如何可有之哉。於有川、竹子嶋杯も、無改ニて相済候旨、伊能申出候由相連候条、此方より無改と申儀は難申入、此方一手改相成候様可申該旨申付候。

同十九日

一、測量方出張之者共より、昨日出之書状を以、つぶら嶋之儀、一昨日申付越候趣を以、伊能へ申談候所、双方論所ニ付、此度は双方へ不拘、測量方一手ニて相改、人数之儀は、双方へ彼之衆より借受候所ニ相成候段、久賀、大卸山浜方、是以一手改ニて、双方役人不立会旨申越也。委細用所留帳記。

同廿七日

一、測量方役人坂部貞兵衛不快ニて、福江表へ參着ニ付、使者并医師等差越候。委細は用所留帳記。

同廿九日

一、測量方伊能勘解由、久賀より川内へ入船、町会所へ上陸有之。

七月二日

一、今朝浜手測量二付、盛繁為見物罷出、伊能勘解由へ及对面。

同日

一、江戸便を以、於、公儀、友松様御逝去之段申来候条遊興鳴物三日停止、普請方不苦旨申付之。

同日

一、町奉行松尾九助を以測量方役人中へ為使者差越候。目録并料理種々差出之。畢而公儀友松様御逝去之旨及為知之。

同三日

一、測量用ニて、領分難儀之旨相聞候二付、当年市中福江、岐宿、大浜、久賀、祭礼踊有之善之處用捨、小人町のみ祭礼有之様申付之。

(中略)

同六日

一、先々之儀、測量用ニて難渋二付、役人共へ之益務、惣て用捨申付候。

同七日

一、測量方掛合宮崎十郎次、中山仁平出仕、昨日富江表へ測量方引越二付引取候由、且又宮崎紋助より、右仁平ヲ以、大村付廻福田直三郎、昨日大浜へ罷越候二付、吸物盃料理等差出候旨、猶又仁平立会、直三郎へ問合候は、東目測量之節、伊能殿へ竹嶋測量之儀申入候處、其御領と相之嶋候間、測量致候ハ、沙汰致與候様、夫より御頼二付遠測し置候趣、答有之候。如何之儀ニ有之候哉之旨申入候處、直三郎相答候は、拙者儀は付廻のみニて、境目之儀存知不申候。尤平嶋ニて役人共申付候は、相之嶋測量有之候ハ、相嶋之事故、為知候様可申入相

達候二付、伊能殿へ其由申入置、氣付も候ハ、掛役共へ掛合候様、相答候様申達越候。

同九日

一、町奉行平田兎毛へ、測量方滞留、殊に貞兵衛氣⁽³⁾二付、乙名斗ニては、市中物入多可有之条、犬之馬場辺へ出張、諸入用承届候様申付候。

(中略)

同十五日

一、測量方役人坂部貞兵衛事、此節病氣差重候段相聞候二付、為見舞家老坪内直記旅宿へ差出候。

同日

一、今夕、右貞兵衛病死之旨相聞候二付、為見舞町奉行差出候。尤、取置等之儀は、宗念寺へ申付候。右二付、遊興鳴物三日停止申付候。

同日

一、右貞兵衛病死二付、長崎奉行所へ勤番口上書にして差越候。書面左之通。

測量方坂部貞兵衛殿、去月廿二三日之頃より病氣ニ有之候二付、旅宿ニおいて療治差加候得共、養生不相叶、去ル十五日昼八ツ時、被致病死候。尤、勘解由殿其外之人数付添、諸事取斗有之候。此段私より御届申上候様申付越候。以上

五嶋彈正少弼内

太田文次右衛門

同廿日

一、坂部貞兵衛病死二付、伊能勘解由方へ

為見舞、折詰差送候。

同廿一日

宮崎紋助俸永次郎事、測量方心掛宜敷段相聞候条、天文方為執行、右役人へ付添、江戸迄可差越旨申付候。右二付て、銀三枚相与候。

同晦日

一、測量方之儀、領分改方相濟候条、右同勢五社丸より出船有之、依之藤原平馬、宮崎永次郎、中山仁平、外二医師老人、小早より付添差越候。

(中略)

(八月廿日)

一、画師大坪栄藏へ、俵子表表相与。是は此節絵図相認、殊測量方へも召仕大儀二付、為賞美右段申付候。

2 (奈留村庄屋) 山本家文書

(前略)

奈留嶋之儀引受、取与候様被仰付、引取申候。御代官荒木勝之助殿病氣二付、測量方下改、拙者八日程相懸り、嶋々ニ至まで相改申候。

一、文化十年西五月、

公義測量御用二付、伊能勘解由殿と申仁、上下拾九人御廻浦、御領内浦々周廻、御改有之候二付、右御用掛宮崎紋助殿、藤原平磨殿御付廻、其外大庄屋松尾求吾殿、中山仁平殿、御蔵元より御仕出方有川寛吾殿、荒木龜弥殿、佐々野藤平殿、三村喜太郎殿

御付廻、右改二付、案内庄屋と申候て、浦々地名、下々名并遠山見渡之名、能心得候ものニ無之てハ、案内不相成由、上五嶋之義は、一統下代役へ被仰付候處、奈留嶋之儀、船見役ニは候得共、倫蔵方へ被仰付候由、御受仕候。

然處五月末、対馬より宇久嶋へ御渡り、夫より有川へ御移り、同所よりハニタ手ニ相成、御改有之候。東ノ手は、伊能勘解由殿、今泉又兵衛殿、小形健次郎殿、箱田良助殿上下拾人、付廻り、宮崎紋助殿、御同栄次郎殿、宮崎十郎次殿、中山仁平殿、荒木龜弥殿其外、夫方ニは、三町足輕小人大勢、村方よりは、惣嶋中十五より六拾迄、人残り無之、夫方差出候。尤荒波二付、大方船測量のみにて、太惣之船々差出申候。倫蔵儀六月十四日より船人相揃へ、佐尾、奈良尾へ出張り、待、倫蔵罷出、無滞相濟、六月廿一日奈留嶋へ御渡り、同廿七日迄ニ無滞相濟、同廿八日久賀嶋へ御渡り、同支配殿測量之節は、拙者方へ案内庄屋被仰付候。

然處七月末迄ニ御領内相濟、平嶋迄被御差送候由。然ルニ拙者儀於御領内、嶋々役人ニは甚以弥敷人物之由ニ付、宜敷申達候様、宮崎紋助殿迄、右測量衆より被仰達候二付、其旨御役所へ被仰上候處、尚又懇ニ申聞候様、被仰付候趣ニ御座候。委細ハ西ノ日記ニ有之候。当嶋惣廻り、浦々入テ凡拾里余、是又別帳ニ認メ置候事。

(後略)

◇連載 第六次測量日記 (五)

伊豫国境から日振島・戸島を経て宇和島まで
文化五年六月

佐久間 達夫

同二十六日 夜八ツ半後、我等、坂部、柴山、青木、稻生、佐助、善八、深浦より乗船、即来嶋（又、龜来嶋とも）、渡海（此所にて七里という）、下河辺（地図に残）、文助病氣、五ツ後即来嶋へ着。（庄屋金五左衛門、同 仲小伝治、手分、我等、青木、稻生、佐助、山を右にて測。坂部、柴山、善八、山を左にして測。両手合測、九ツ後乗船、七ツ頃深浦へ帰着。郡方下役郷目付差添、外海浦庄屋勝之丞、並 即来嶋庄屋金五左衛門、仲小伝治親子共案内。冲嶋庄屋佐十郎出る。大船頭本城市左衛門関船にて渡す。此夜宇和嶋勝手方元ノ金子孫之丞、宇和嶋より使者、我等へ綾布三尺、金三百疋、坂部、柴山、下河辺、青木へ綾布三尺、金三百疋宛、秀藏へ綾布三尺、金百疋、佐右衛門、文助、庄作へ金百疋宛、佐助、善八へ銀貳両宛、下役衆僕四人、藤吉へ青銅三百兩御贈被下、帰府伺迄、金子孫之丞へ預け置。同国吉田領郡方下役増田宗右衛門、同領白浦庄屋赤松佐左衛門来る。此夜郡方陣味役都筑九右衛門出る。沖ノ嶋出役後宇和嶋へ越。当国着後初て出る。此より日々付添のよし。当国入口より勘定方金子五郎左衛門、三浦喜兵衛出役の由、併し断なし。

同二十七日 朝中晴。同所逗留にて手分。先手我

等、柴山、下河辺、稻生、佐助、深浦嶋ヶ崎より初、外海浦の内久良浦にて小枝田迄の山越横切の印残。即 久良浦にて中食し同浦字天花岬迄測。後手坂部、青木、文助、佐助、二十五日測留深浦持字西敷盛より初、外海浦の内岩水浦（人家あり）、満倉村（人家あり、満倉川あり。外海浦の内にあらず）、外海浦の内垣内浦を歴て深浦にて中食。それより同浦持字嶋ヶ岬迄測。先後手八ツ半前後に帰宿。松山領去寅ノ嶋案内（郡役人）杉田雄五郎 須賀庫蔵来る。

同二十八日 朝曇天。六ツ後深浦出立。三手分。我等、庄作、藤吉に手伝させ、郡方下役小川五郎兵衛、外海浦庄屋勝之丞案内、直に当木嶋へ向、昨夜より大波瀾に付、宇和嶋大船（即 セキ舟）乗し潮渡海、北半周を測。それより福浦字カザハツシへ渡り、逆に福浦人家前を過、字スズコバへ迄測。坂部、下河辺、文助、善八、堤浦（旧名今改いわく久家浦）の内字小枝田（舟越浦入会 家数五軒）、宮山浦の内小浦（家二軒）同浦の内欄月（家一軒）、船越浦（此所より横切し）、堤浦（今日久家）、同浦下堤浦を歴て堤浦と福浦の境字垂水崎迄測。柴山、青木、稻生、佐助、深浦持字天花岬より初、堤浦、舟越浦入会字小枝田迄測、別手の測に合、それより同所横切山越久良浦、昨日の残印へ

繋。三手一同七ツ後福浦着。止宿 本陣 与双新蔵。別宿百姓幸吉。

同二十九日 朝晴曇。南風。福浦字鼻面絶壁大岩石 波高船測難相成。朝六ツ半前、柴山、青木、文助、善八、当浦字カサハツシより初、山道字橋迄測、それより乗船、八ツ半頃に福浦帰宿。東河、下河辺、佐助、朝同前出立、福浦字スズコバへより初、乗水崎昨日坂部組の測留へ合測し四ツ後に帰着。（稻生地図）。

閏六月朔日 朝七ツ半頃福浦出立。手分。坂部、青木、文助、善八、乗船して福浦字金山より山道を測んとす。大南風にて金山下へ到る事ならず船を乗帰し船越浦へ着。同所横切印より初、内泊浦を過て中泊浦止宿迄測。それより同浦字ミミケ鼻迄測、七ツ後中泊浦へ着。柴山、下河辺、稻生、佐助、字橋より初、字金山迄山道を測。難所にて七ツ半頃に帰着。我等は先へ止宿へ至り、北極度を写。中泊浦止宿 本陣 喜三兵衛、脇宿庄治郎。此夜晴天測量。

同二日 朝晴天。同所逗留測。此日三手分、我等、柴山、稻生、藤吉、堤嶋一周を測。坂部、文助、善八、昨日測留字ミミケ鼻より初、福浦海辺、同村字金山迄測。下河辺、青木、佐助、横嶋一周を測（五六丁難所に付不測）、又 字金山より測初、五六町程にて坂部組へ合測。共に八ツ頃帰宿。此方組八ツ後に帰宿。此夜豊後国臼杵稻葉伊予守領分 煙草屋弥平治測量様子聞に来る。

同日 晴天。朝七ツ半後 中泊浦出立。後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、舟越浦横切印より初、外海浦、内海浦境字薩崎迄測る。又、舟越浦の内字引舟越より中浦字尻尻迄横切、坂部、柴山、文助、善八、薩崎より初、中浦の内字地藏波石ノ谷迄測、両手八ツ前後内海浦の内中浦着。本陣組頭久右衛門、別宿武助、此夜晴天測量。内海浦(郷浦十ヶ所)、中浦、赤水浦、成川坊城村、深泥浦、平山浦、並、柏崎浦、須ノ川村、平波石浦、家串浦、魚神山浦なり。内海浦、平山浦、実藤平左衛門家居。

同日 晴天。朝六ツ後中浦出立。手分。後手我等、下河辺、青木、佐助、中浦より初て、逆に地藏バへの谷(先日測留)迄測、それより引帰し、又中浦下より初て、順に尻尻迄測(引舟越より横切へ繋、それより唐殿にて中浦字初ヶ崎まで測、先手へ合測。又、平山浦、大嶋一周を先手と分測。後手坂部、柴山、文助、佐助、内海浦の内中浦字初崎より初、赤水浦の内字高畑(人家九軒)、赤水本浦を歴、内海浦の内成川坊城村迄測(人家成川村三軒、坊城村三軒)。それより大嶋一周を後手と分測、共に九ツ後平山浦へ着。止宿 本陣内海浦庄屋実藤平左衛門別宿も同。此夜晴天測量。備中国大江村谷東平、会田三左衛門、添状を持来る。

同日 晴天。同所逗留測。六ツ半頃出立。手分我等、下河辺、青木、稻生、佐助、同村止宿、下より逆に同浦、並、長洲村、平城村、深泥浦を歴て成川坊城村

(尤 坊城村々方、昨日赤組測終へ繋。坂部、柴山、文助、善八、平山浦止宿より順に摺木村(人家は三四丁、五六丁奥、同村字茂原へ人家二三軒、海辺にあり)を越て摺木村の内字室波石まで測る。逆測は四ツ半後、順手は八ツ頃帰宿。此夜晴天測量。

同日 晴天。朝七ツ後平山浦出立。後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、摺木村字室波石より初、同村(地先人家へ近五六町。遠き所は七八町)、同字室手(家三軒)、柏村(名主平五兵衛案内)、柏崎浦を過、同浦字権現崎迄測、後手坂部、柴山、文助、善八、柏崎浦字権現崎より初、柏村地先を通、洲ノ川村平波石浦を歴て家串浦迄測、先手は八ツ頃家串浦へ着。止宿本陣 曹洞宗泉法寺、飯亭主実藤平左衛門、別宿組頭嶺右衛門。此夜晴天測量。

同日 晴天。先手朝六ツ前、後手六ツ半前、家串浦出立。後手我等、柴山、稻生、佐助、家串浦下より初、魚神山浦字舟越迄測、塩鷲嶋一周、又、船越より横切、下薩浦の成浦迄測、印杭を以、先手坂部、文助、善八、字船越より初、魚神山浦人家下迄測、それより同浦西泊を経て同浦の内字アマ嶋迄測、後手は八ツ頃、先手は八ツ半頃に魚神山浦真浦着。本陣 与双与左衛門。別宿利右衛門。下薩浦庄屋赤松宇多之丞出。此夜晴天測量。外海浦、内海浦を御庄組という。下薩浦は津崎組の内なり。

同日 晴天。三手分。朝六ツ前乗船。後手下河辺、文助、善八、魚神山浦字アマ嶋より初(内海下薩界は小猿嶋、大猿嶋の間にあり)、ユラ崎押上り

岬迄測、先手柴山、稻生、佐助、押上岬より(須下浦地先)字六十部迄測、我等一人(庄作、藤吉手伝)内海浦、小猿嶋、下薩浦、大猿嶋各一周(少々見切)を測、それより須下浦字六十部より初、須下浦止宿下迄測。我等は九ツ後、先手は九ツ半頃、後手八ツ頃須下浦へ着。止宿(下役中共)百姓順藏。内海浦庄屋勝之丞 鶴来嶋庄屋小伝次。此迄付添案内、当所より帰る。外海浦庄屋実藤平左衛門も帰る。是より下薩浦庄屋赤松宇多之丞、山財村庄屋三石衛門。山鹿村庄屋吉石衛門、同村庄屋格儀兵衛、岩松村庄屋武兵衛、下薩浦案内の由をいう。下薩浦、十七ヶ所、須下浦、成浦、平井浦、柿浦、塩定浦、浦知浦、針木浦、嵐浦、磯崎浦、弓立浦、坪井浦、泥目水浦、田下浦、脇浦、曾根浦、竹ヶ嶋、合十七浦、此夜晴天測量。此日より青木病氣。

同日 晴天。七ツ半後、須下浦三手分、我等、稻生、庄作、藤吉、竹嶋一周を測、同嶋続の高嶋半周を測、四ツ後に鼠嶋浦着。止宿下薩浦庄屋赤松宇多之丞、脇浦浄土宗淨智寺。下河辺、文助、佐助、成浦境三治郎鼻より初、平井浦を歴て柿浦の内崎嶋代迄測。坂部、柴山、須下浦止宿下より初、成浦(舟越横切印杭へ繋、それより三治郎鼻迄測、先後手九ツ半前後鼠嶋浦へ着。同国吉田伊達若狭守郡方中見役増田宗右衛門(二十六日深浦出の人なり)、同鈴木作兵衛、道方小野川権左衛門、同付回立間村庄屋西村善治郎来り向。

同日 朝曇。同所逗留留測。六ッ半頃出立。手分。我等、下河辺、稻生、佐助鼠嶋浦止宿より順測。(右山に添)弓立浦、坪井浦迄厩にて測、それより横切山越(同前厩を用)、泥目水浦の字大越迄測、それより泥目水浦、田下浦、脇浦を歴て曾根浦人家限迄測、我等、庄作、藤吉、又、手分をなし、坪井浦へ横切印を残し、それより長麻縄にて内海通石山に添(坪井浦、泥目水浦)界、一ッ波石を歴て泥目水浦字大越横切印迄測、四ッ半前に帰宿。別手九ッ後に帰宿。坂部、柴山、文助、善八鼠嶋浦止宿下より初、逆測横浦、嵐浦、針木浦、浦知浦、柿浦を歴て同浦の内館網代迄測、昨日先手の残印へ合測、四ッ半前に帰宿。八ッ頃白雨あり。直に止む。此夜晴天測量。

同十一日 朝より晴天。七ッ後下藤(鼠嶋浦)出立。手分、両手共乗船。後手我等、下河辺、稻生、佐助、昨日測留曾根浦より初、吉田領境字羽釜迄測、それより吉田領小堤浦の内門ノ洲(家三軒あり)を歴て洲浜に至。又、小手分し、麻縄にて柏崎を回測、一同九ッ前に吉田領北麓ノ浜浦へ着す。止宿。本陣。北麓ノ浜浦庄屋清五郎、別宿、濱家宗輔陀山慈濟寺。吉田領界へ出迎の者、郡方中見役鈴木作兵衛、同浅見猪左衛門、同兵頭友右衛門、道方小野川権左衛門、其外吉田領白浦庄屋赤松佐左衛門、河内村庄屋山下源治郎、立間村庄屋西村善治郎、二及浦庄屋豊田仁左衛門、安土浦庄屋安之丞、深浦庄屋仲庄吾、小瀬浦庄屋清五郎

浅川浦横目(与頭と同)兵六なり。先手坂部、柴山、文助、佐助、吉田領北麓小堤浦洲浜より初、大堤浦、(同浦内、大内浦、玉ヶ月浦(同浦内電浦、それより字竜王吉田領字和嶋嶺なり。それより字和嶋嶺岩松村同高田村の内浅新田、同近家村迄測、九ッ半頃に小瀬ノ浜着。九ッ半後に白雨あり。八ッ半頃に吉田郡奉行高月織右衛門見舞に出る。無程。同所元役矢野十郎左衛門使者、我等へ真綿三把、金貳百足、文助、佐右衛門、庄作へ金百足宛、袖取佐助、善八へ白銀貳兩宛、藤吉、並、下役中僕へ青銅三百兩宛、領主より御禮物被下候。即、元々矢野十郎右衛門へ帰府同済迄預る。北麓十四ヶ浦、小堤浦、大堤浦、玉ヶ月浦、編ノ浜浦(庄屋住所本浦という)、宗清浦、国延浦、面浦、網代浦(二ヶ浦共に国永浦という)、家次浦、喜浦、松浦、牛浦、尻具浦、掛網代浦、福浦、合十四、吉田領へ目付役白井久助案内。此夜晴天測量。

同十二日 朝より晴天。六ッ前。北麓ノ浜浦出立。手分。我等、下河辺、稻生、庄作、佐助、昨日赤組測留字和嶋嶺津島組、近家村、堀内塩浜より初、吉田領北麓の内編ノ浜浦、宗清浦、国延浦、国永浦(面浦、網代浦、合いわく国永浦)字松笠迄測、直に栗船中飯し、九ッ半頃に吉田領下波(結出浦)着。止宿。本陣下波浦庄屋行平治。脇主則村庄屋藤之丞。此日吉田領將淵浦庄屋安右衛門、明日止宿の由にて出る。取部、柴山、文助、善八、北麓の内国永浦字松笠より初、家次浦の内内浦(家三軒、家次浦、木浦、松浦、牛浦、尻具浦、掛網代浦(同浦

の内)、水ヶ浦、福浦の浜辺へ横切し終る。八ッ頃下波結出浦へ着。此夜晴天測。吉田領下波浦(狩津浦、即島津浦支配、仍、島津浦一浦とす)、島津浦、小島津浦、西浦、結出浦(庄屋居)、東浦、繁浦、カキ浦、神崎浦(大地浦、神崎浦支配、共十ヶ浦、合八ヶ浦)、下瀬浦、庄屋赤松宇多丞山財村庄屋勘右衛門、近家浦庄屋吉右衛門、当止宿へ出る。

同十三日 朝晴天。六ッ前下波結出浦出立。坂部、柴山、文助、善八、下波繁浦より初(即、同浦より明越峯領界迄横切し印を残し)、麻縄にて下波柿浦、神崎浦、同浦の支配大地浦迄測、即、下波浦、將淵浦の界なり。下河辺、青木(今日より出勤、途中にて柴山と替る)、稻生、佐助、下波繁浦より逆測(即、左山に添)、東浦、結出浦、西浦、小島津浦、島津浦を歴て、北麓福浦字小浜迄測、昨日赤組横切印(藤嶋の測へ)合測。我等、庄作、藤吉、北麓福浦字小浜より初、麻縄にて福浦岬を回、赤組の福浦横切へ繋ぎ合、それより乗船し黒嶋一周、契嶋一周を測、赤組は九ッ半頃、白組は九ッ前、我等は八ッ半頃、將淵浦横浦着。止宿。本陣。將淵浦浦庄屋安右衛門、飯亭主、石原村庄屋甚助。別宿。同浦浄土宗光照寺。飯亭主伝吾。此夜晴て測。吉田領將淵浦、六ヶ浦、高助浦、横浦(庄屋居)、豊之浦、宮市浦、宿の浦。大嶋浦なり。此日芸州大庄屋原田十兵衛、庄屋長浜兵右衛門、庄屋田部徳兵衛来る。

同十四日 朝より晴天。將淵浦逗留。六ッ前乘

船。手分。我等、文助、庄作、佐助、下波浦、大池浦より初、將淵浦の内高助浦、横浦、豊浦、宮市浦、(但三ヶ浦人家入会)宿浦、大嶋浦を歴て(横浦、豊浦、宮市浦入会字藤ノ尻迄測、赤組と合測。坂部、柴山、善八、宇和嶋領遊子浦、將淵浦界より細木網代横切、それより將淵(横浦、豊嶋宮市浦)入会字藤ノ尻にて白組と合測、共に乗船、八ッ前に帰宿。日振嶋庄屋清家六郎左衛門見舞に来る。

同十五日 曇晴。朝七ッ前 將淵横浦出立。乗船手分。坂部、柴山、善八、日振嶋持の御五神嶋へ渡り一周を測。我等、文助、庄作、佐助、日振嶋の横嶋半周を測。それより日振本島へ渡、ハイソ鼻より初、同嶋の内 喜路浦、明海浦、即 本浦、測量越迄測。下河辺、青木、稻生、横浦より直に日振明海浦渡り地図を成、赤組は八ッ頃、白組は八ッ半頃に着。止宿日振嶋明海浦庄屋清家六郎左衛門、平十郎、上下十六人同宿。此日も郡代下役郡築九右衛門、横田儀兵衛、小川五郎兵衛、森丈右衛門、大船頭本城市左衛門出る。案内下村庄屋林左衛門、高山浦庄屋善左衛門、戸嶋庄屋弟助九郎、戸嶋三ヶ浦は小内浦、加嶋浦、戸嶋本浦也。戸嶋庄屋庄右衛門出る。七ッ半後浅草層局御用状届。此夜晴天測。

同十六日 朝曇天。同嶋逗留測。六ッ後出立。手分。柴山、稻生、善八、昨日白組測初の日振嶋ハイソ鼻より右山に添て測、字ヒルガ浜にて手分、赤組と

と合測。我等、文助、善八、日振嶋、明海浦測量所より初、左山に添、同嶋の内能登浦を歴てヒルガ浜にて手分、白組と合測。我等能登浦より又手分して郡代下役小川五郎兵衛を相手に字ササカ字トウノ浜二ヶ所横切、それより竹ヶ嶋、沖ノ嶋、各半周を測、一同八ッ半頃に帰宿す。日振嶋は喜路浦、明海浦、能登浦、三ヶ浦也。

同十七日 朝晴天。七ッ後日振嶋出立。乗船手分。我等、文助、庄作、佐助、戸嶋瀬越より初、同嶋字間之下迄測、それより遠戸嶋へ渡一周を測(即二十三町三十五間)、又 間之下より初、戸嶋の内字ビシヤゴ(家四五軒あり)を歴て戸嶋本浦迄測、下河辺、柴山、善八、戸嶋長崎鼻より初、字瀬越にて手分へ合測。それより鳥越浜迄測、外に加嶋一周(即二十五町四十間五尺)測、七ッ頃に着。白組は八ッ前に着。止宿 戸嶋本浦庄屋庄右衛門(上下不残同宿)。此夜晴天測。

野浦へ着。止宿庄屋俊治(不残同宿)、上波浦八ヶ所、津野浦、水荷浦、塩屋浦、万匠浦、甘崎浦、小矢野浦、矢野浦、明越浦也。明日止宿三浦庄屋九兵衛来る。三浦八ヶ所、安米浦、大内浦(庄屋居)、尾崎浦、深浦、弓立浦、結出浦、夏秋浦、舟隠浦、合八ヶ所なり。此夜晴天測。

同十九日 朝より晴天。七ッ半後、我等、文助、庄作、佐助、矢野浦出立。上波矢野浦持高嶋一周(即 一里四丁余)。それより乗船引返し矢野浦止宿下より初、上波浦の枝明越浦先手の残し置山越印へ繋合、それより直に三浦、大内浦へ行、柴山、下河辺、稻生、善八、六ッ後乗船、明越浦(去る十三日下波繁浦より明越峠迄測印を残)より明越峠へ繋測し、それより同浦安米浦、大内浦止宿前を過、竹ヶ崎迄測。白組は九ッ後、赤組は八ッ頃三浦、大内浦着。止宿庄屋九兵衛 不残同宿。此夜晴曇測量。

同十八日 朝晴天。六ッ頃戸嶋本浦出立。赤組坂部、柴山、善八、上波浦枝津野浦字神田より初、津野浦同断水荷浦、同断塩屋浦、同断 万匠浦、甘崎浦同断小矢野浦を経て矢野浦(庄屋俊治居)の測所迄測、八ッ頃着。後手白組我等、文助、庄作、佐助、戸嶋本浦止宿下より初、逆測左山に添、小内浦(戸嶋の枝)を歴て字鳥ノ巣迄測、昨日赤組の測留へ合。それより乗船地方へ渡、吉田領將淵浦宇和嶋領上波浦より初、上波浦の内津野浦地先字神田迄測、赤組へ合測。八ッ半後上波矢

伊能図探究 第十二号

伊能日本図探究会 渡辺 一郎

伊能図見て歩き (五)

京都大学図書館蔵 伊能諸図

京都大学図書館は伊能図九舗を所蔵している。これは忠敬が土浦の内田家に謹呈した図を購入したものである。経緯が記されたつぎのような紙袋におさめられている。

(表側)

対州全図

壹岐国図

四国淡州沿海地図

九州六箇国之内沿海地図

大隅国馭謨郡屋久島沿海図

大隅国熊毛郡種子島沿海図

肥前国(平戸島、生属島、黒・大島、高島)沿海之図

同 五島沿海上下 二景之図

合計九葉在中

(裏面)

下総佐原伊能三郎右衛門忠敬従、祖父佐左衛門義制分与ヲ受ケ我家ニ伝リ居、今尚親戚伊能源六君拙宅ニ遊び、

此図ヲ相見、祖父忠敬之分間縮図ニシテ、大、中、小之三部之内、中絵図則是也ト確言ス、以テ内田家之秘図トシテ世ニ相伝フ可キ物トス

内田 順信 印

謹記ス

対州全図 縦三三二×横一〇一センチ

対馬部分の大図。折本。裏打なし。虫・傷なし。五七×四一センチの和紙を接合する。文字は達筆。村名、村界、郡界を黒の極細の文字で書いたあと、朱の大形文字で重ねて書く。

たぶん、試作したあと、字が小さいと、朱で書き直し、バランスをみたのであろう。朱の地名も達筆。地図面の左側に対州全図校合洛と朱書きする。

大図なので経緯線、方位線はない。朱の測線は細い。針穴がみられる。緑は東博中図に近く濃い彩色。水色は淡い。平地はピンク色。砂浜、田畑、家並みなどを表現する。神社は記号ではなく〇〇神社と書く。鰐浦、佐須浦に朝鮮国渡海港と表示がある。

九州六箇国之内沿海図 縦一八六×横一四一センチ

九州第一次測量後の中図稿本。針穴あり。彩色は対馬図に同じ。文字は丁寧であるが、対州図よりやや粗か。経緯線、方位線なし。国名、郡名、および境界の表示なし。中図の合印は一つもない。方位円、接合記号なし。紙サイズ四一×五九センチ。

虫、傷はないが、汚れ少しあり。読図には支障がない。本図は、彩色、測線、地名、まで書いてから、地図仕立て方針が変わり、作業を中断した稿本ではなからうか。折本。裏打なし。

壱岐国図 縦八八×横八二センチ

壱岐島の大図。描画は精緻で、海岸の崖の実況、海浜の岩石、砂浜などを精細に写す。測線は崖うえ、中腹の通路、砂浜などに描きわける。彩色は濃い緑、緑色に黄味が少ない。全体的に対馬図より精密である。絵師の筆か。

地名は黒の達筆な細字のあと、朱の大形文字（達筆）で再度記入する。朱の村名には、校合の際つけたと思われる朱のチェック表示がある。本図は最終大図の試作品ではないか。折本。裏打なし。

方位線、経緯線、接合記号はない。方位円は記入されているが、彩色されていない。紙サイズ四一×二九センチ。

四国淡州六分下図 縦一三四×一七二センチ

四国、淡路の中図稿本である。測線と地名を黒で記す。あとは山地の黄緑、平地のピンクのみ。経緯線、方位線、合印はない。

虫、傷なく、文字は達筆。図中に霞がたなびくほか、左端に九州の遠望を描く。針穴あり。折本。裏打なし。

肥前国松浦郡平戸領 縦一六九×横一一九センチ

自 調川村大印 街道海辺を巡りて
至 江迎村字白岩白印

附 平戸嶋、生属嶋、其外小嶋、黒嶋、大嶋、度嶋

平戸領を描く大図。平戸の松浦史料博物館所蔵の平戸図の下図か。折本。針穴あり。裏打なし。

描図形式は壱岐に同じだが、海岸など精細度はやや劣る。緑は青味が強い。紙サイズ 縦二八×横四一センチ。

地名は、黒の中形文字で書かれたものを、達筆な朱の大形文字で追

加記入している。方位線、経緯線、接合記号なし。方位円は白のままで彩色なし。余白に海付図校合済の記入がある。

肥前五島沿海上下二景之図 上 縦一七二×横九五センチ

描図形式は壱岐図に同じ。大図稿本。小形の黒色文字で書かれた地名を朱の大形文字で再度記載する。校合のための朱のチェックあり。領主名を朱で大きく追加。裏打なし。

海岸の測線は崖下の砂浜をとる。海は濃い水色。伊豆七島図のように島の内部もすべて描画彩色する。針穴あり。方位線、経緯線なし。接合記号もない。合印は湊のみ書かれ他はない。方位円一箇白抜きのままとする。紙サイズは三〇×八三センチ。

相嶋を描き、傍らに朱で「当嶋本図可省」と記す。

肥前五島沿海上下二景之図 下 縦一一七×一六一センチ

描図形式は上に同じ。島内全部を描画彩色する。

大隅国取謨郡屋久嶋沿海全図 縦七五×横一〇一センチ

濃い彩色。地名は朱で大きく記す。彩色が濃いので文字はよくわからない。海岸線は壱岐と同じ描図でリアル。経緯線、方位線、接合記号なし。中央に彩色の方位円がある。合印は湊のみ。用紙サイズは三八×二七センチ。

大隅国熊毛郡種ヶ島沿海図 縦一五七×横七八センチ

暗い緑色の山景の間にピンクで平地を描く。全体にくすんだ感じである。地名の朱書き追加は他の図に同じである。方位円には彩色があるが未完である。合印は、湊、神社がある。

須賀田家（茨城県鹿島市）蔵 特別地域図 天の橋立図

縦五八・五×横七八・五センチ

茨城県鹿島市（旧大野村）の須賀田家は、江戸時代はこのあたりの大庄屋であった。豪勢な門構え、式台つきの玄関に往事を偲ぶことができる。

同家には、伊能家五代目をついだ「伊能こう」さんの妹「りつ」さんが嫁いでいる。嫁入りるとき、持参した伊能図があるとお話なので、お願いして、藤岡健夫氏の案内で、拝見させていただくことができた。

須賀田家の伊能図は、文化四年提出の、天の橋立図の副本であった。丁寧な描画で濃い彩色の美麗なものである。宮津城、西国札所の成相寺、家並、田畑、橋立の砂州などが鮮やかである。（二二頁）

伊能家から出たことが明らかで、針穴があり、仕上げもよいので、副本と考えてよいものである。

彩色の緑は東京国立博物館の中図と同じ調子である。他の特別地域図と同じに、経緯線、方位線はない。方位を示す円は筋のみで彩色がない。ここだけは未完成のようである。

もと折本だったものを軸装してある。折本のころついた埃の跡が残っているのは大変残念である。

（九六・六・一〇 調査）

名古屋市立図書館逢左文庫蔵 沿海地図小図

折本一舗。題は大日本沿海里程測量図。尾張徳川家の重臣・大道寺直寅の用人水野正信が写したもの。直寅は城代家老などを勤めた。正信は世間の最新情報に関心が強く、文政元年から、明治元年までの間、「青窓紀聞」二〇四冊をはじめ、五〇〇冊の写本を残した。

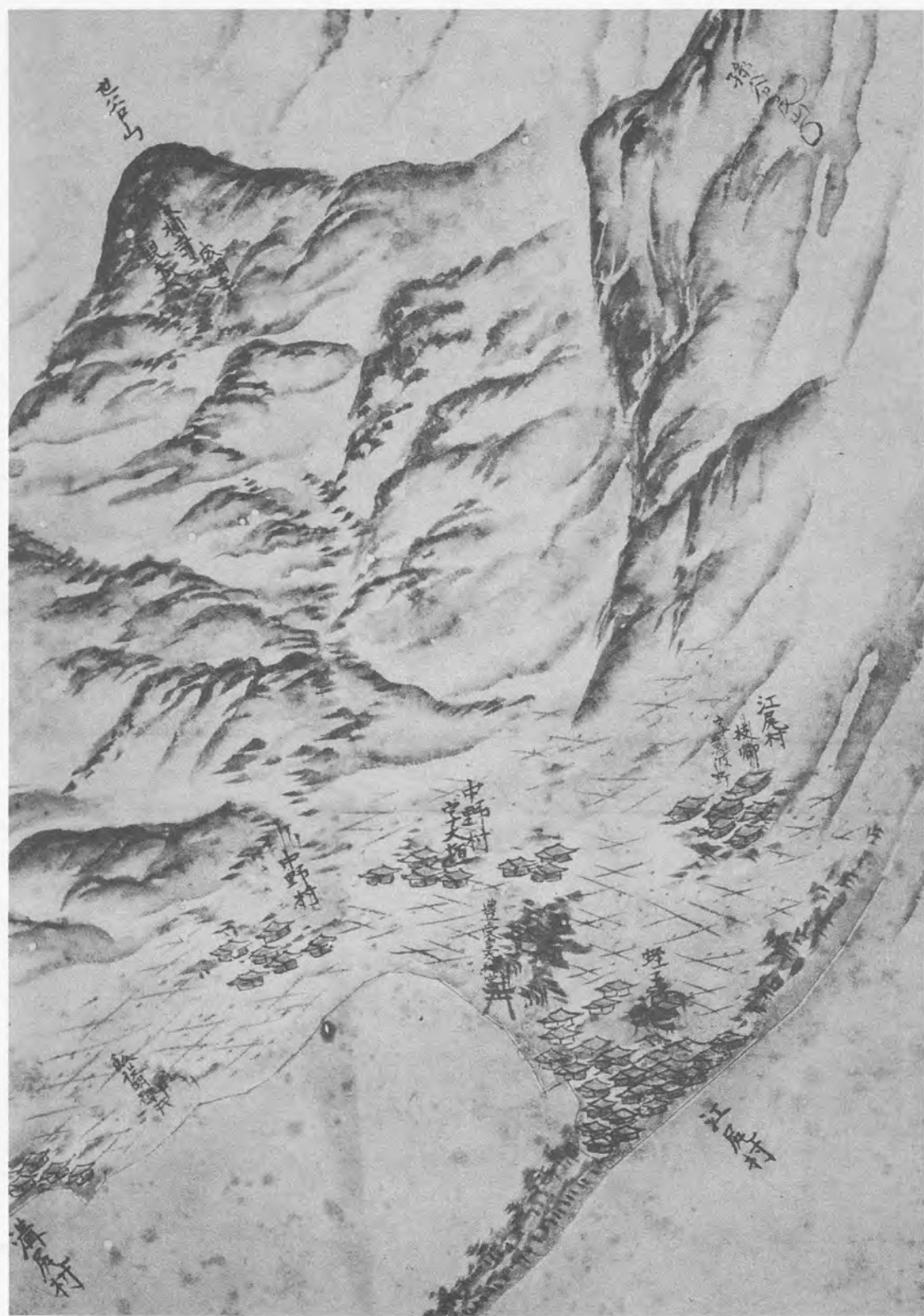
ペリー来航時、大道寺は尾張藩の海防御用取り扱いであったので、関連して集めた資料を多く写している。沿海地図小図はその資料群のなかの一つで、自ら写したと思われる。地図は専門外なので、写図は粗であるが、沿海小図の形式は備えている。

針穴は当然ない。経緯線もない。描図範囲は沿海小図と同じ。吉田勇太郎の識語、忠敬の凡例、里程表三表も写す。裏打ちなし。細かい和紙を張り合わせている。文字は稚拙、記号を手書きするので変形が多い。記号の位置は場所によりまちまち、湊記号なし。郡界●も少ない。宿場○、天測地点☆はよく書いているが、朱の測線の間に書いたものがある。虫所々にあり。

山景の緑は山の先端を少し染めるのみ。河川は、濃い水色で過大に表現、特に利根川、富士川、阿部川、大井川など。本州中部に描くコンパスローズは可成りの手抜き。方位線は、富士山二七本、蝦夷大嶋八本、蝦夷小嶋八本。北海道、津軽半島、下北半島、三陸沿岸の沿岸部を黄色で染める。黄色は砂浜の表示であるが、勘違いして途中まで描いたがやめたのであろう。

専門外であるが、沿海地図の評判を聞いて、とにかく内容がわかればよいとして写したのか。しかし原図を陪臣の家来がどうやって借り出したのであろう。そちらのほうも興味がある。

縦二三六センチ×横九五センチ （一九九六・二・一七 調査）



世田谷の伊能家にあった

本州東海岸測量の凡例の草稿

渡辺 一郎

享和二年に提出された本州東海岸測量の伊能図は、伊能記念館と早稲田大学付属図書館に現存するが、いずれも凡例はない。しかしながら、凡例の草稿と思われる史料が伊能家で反古を整理中に見つかった。第二次測量の本州東海岸の図にも凡例があったようである。（忠敬の筆跡ではない）

豆州以至蝦夷沿海道路里程図凡例

この間の城下、陣屋、その外道筋、神社、仏閣の記号入りの事

一、沿海図大小二図に製す。大図は州郡村里の分界、道路・河川の形象を細密に図せん事を要す。但し、図象頗る大にして観覧に便ならず。故に分て十図とす。小図はその全形を見るに便利あらん。為に前年測量する蝦夷図連綴して全図に製す。而して大図は曲尺三寸六分を道程一里とす。即ち三十六町、曲尺一分一町に当る。一間六尺とし、一町六十間とする。小図は大図の十二分の一に製す。故に曲尺の三分は道程一里に応ず。一分は十二町に当たるなり。此処より彼処に至り幾里なること、左右前後一覽し知るべし。たとえば、相州浦賀、豆州下田等より奥州海辺にいたり、あるいは蝦夷地等への海路及び陸路も、皆道路にしたがって綯線を引き施すとき、その里程幾里なることを知る。唯平坦の地は寸尺差なしといえども、山澤等の險局曲の処は図上の寸尺縮まるなり。

研究会ニュース速報

○かねてから検討されておりました江戸東京博物館における『伊能忠敬展』は、九八年四月二十一日から約二ヶ月間と内定いたしました。この時期に合わせ、江戸東京博のホール（五〇〇人収容）で、例会を兼ね当会の会員による講演会を予定しております。皆様多数お誘い合せ御出席下さい。また、講演者を公募します。講演要旨をお送り下さい。締切りは十一月二十日です。

○日本歩け歩け協会と朝日新聞社を中心に検討されていた忠敬の測った道にそって、全国を歩く忠敬ウォークは、一九九九年一月二十五日に東京を出て、二〇〇一年一月一日に東京に帰着することにはほぼ固まりました。時間に余裕があり、足に自信のある方は是非ご参加下さい。いまから習練しても間に合うでしょう。全国を歩く本隊のほか、県単位に踏破する区間隊員、盛りあげるためのサンデー参加などもあるようです。

○忠敬ウォークを応援するため、国土地理院で伊能の測った道を現代の地図の上に表現することになりました。作業を本会で受託し、会員諸兄に御協力いただいています。

○秋季例会は、間宮林蔵記念館と地図と測量の科学館（国土地理院）の見学会を予定しています。期日は十月二十五日（土）東京からバスで日帰りします。参加者は八月末までに事務局へお申込み下さい。

伊能忠敬研究会入会案内

一、本会は、つぎのような活動をおこなっています。

(一) 会報の発行(当面、年四回)

各号三六頁。伊能図探究を継承するので、初号は第七号から。

(二) 年次大会・例会の開催

年一回の年次大会と例会を開催します。一般講演、各種の発表のほか史料、伊能図の展示説明等を併催します。

(三) その他付帯する事業。

投稿規定

・会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお任せねがいます。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

・一頁は、二段組三十一字×二六行×二段で一六二二字、三段組二〇字×三〇行×三段で一八〇〇字です。タイトルと写真はこれの中に含めてください。また、提出した原稿の返却は致しません。

二、入会方法、会費等

(一) 入会申込は、住所、氏名、職業、専門、電話番号、FAX番号などを書いた申込書を左記にお送りいただくとともに、小為替または銀行送金等で年会費六千円を御送金下さい。

(二) 申込先 〒一六二 東京都新宿区下宮比町二の二八の五〇四
飯田橋ハイタウン五〇四

伊能忠敬研究会(事務局 渡辺一郎)

(三) 送金先 郵便振替口座 〇〇一五〇・六・〇七二八六一〇

伊能忠敬研究会あて

三、本誌の編集委員はつぎの各氏にお願いしております。

安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取禎良(前佐原市教育委員会教育次長)・小島一仁(佐原市史編集委員)・斉藤 仁(学習院女子短大)・佐久間達夫(元伊能記念館館長)・清水靖夫(立教高校教諭、法政大学講師)・芳賀 啓(柏書房取締役編集長)・渡辺一郎(伊能日本図探究会代表、会社会長)
(五十音順)

編集後記

●春季例会は、盛会の内に終わりました。研究会も、アレヨアレヨという間にこんな賑やかになってしまい、戸惑いをかくせません。

●『お信さん』のことを調べていて感じたことですが、今はやりの、「人生を一度生きる」のは、なまやさしいことではなく、四十代に準備を始めなければものにならないようです。忠敬が第二の人生に踏み出した時期は、今まで考えられていたよりは、数年早く四五・六才と思われるからです。もちろん、彼のような立派な人生を生きねばならぬ場合は、ですが。

(あ)

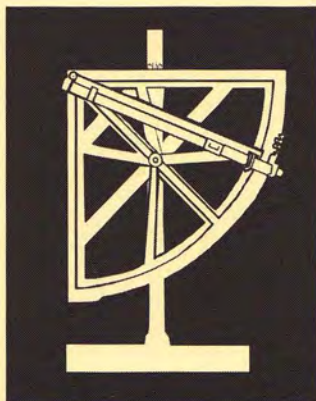
●はからずも九州特集号のようになってしまったが、現地に立つと机上ではわからない何かを感じるもの。大切にしたいと思います。それにしても、九州女性のバイタリティには圧倒されっぱなしでした。

(い)

THE INO TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INO'S MAP AND WRITINGS

No.12 Summer 1997



Why Ino Tadataka now ?	WATANABE Ichiro
Newcomer-As a Ino Tadataka freak	SATO Yoshihisa

REPORT

Summary of the 1997 Spring Term Regular Meeting	TAKEDA Takeshi
Notes on Participating in the Regular Meeting	SHIRANE Sadao
Participating in the Regular Meeting	KOIKE Miyuki

ESSAYS

The first memorial building and Genkuji Temple	SUDO Ikuo
--	-----------

TOPICS

Teacher's Textbook from 1933

MATERIALS

- Promoters of the Ino Maps ANDO Yukiko
- Tsuku Island INO Yoko
- Goto Reference/Extract related to the Ino Survey Team OKAMOTO Teruko
- The 6th Survey Diary SAKUMA Tatsuo

THE SEARCH FOR INO'S MAPS

Walking around looking at Ino's Maps	WATANABE Ichiro
Membership, Regulations on submission of papers, Editorial news	

Edited and Published
by
THE INO TADATAKA SOCIETY